ラ3-2A

438
77

少年武士道

果敢三義著

683

少年武士道

梁取三義

少年武士道

Y8
1176

國會圖書館
55.5.21

80W19805

戰時下の青少年諸君に贈る

（序にかへて）

梁取三義

大東亞戰爭は、大日本帝國有史以來の大戰爭である。

しかしその前途には洋々たる勝利の希望が約束されてゐる。

私はそれを想ふと、日本の國土に生を受けたもののみの知る、有難さに涙が滂沱として頰をつたふのを禁じ得ないことがある。

勝利を約束された戰ひ、

それは、いかにはげしい戰ひであつても、いかに困難な戰ひであつても、笑つてその苦境を突破出來るではないか。

じつと耐え忍んでゐること、たゞそれだけで一歩一歩と勝利へ近づいてゐることを思へば、その苦痛の中にさへつねに樂しさが湧き上がつて來るではないか。

私達は、どんな困難に出會つてもどんな苦痛に直面しても今次の戰爭だけは笑つて耐えて行かれると思ふ。

見よ支那事變以來七年、しかもなほ國民の顏には、たゞ一つの暗影さへも見られないではないか。

だが。こゝに負けると知つてなほ戰はねばならぬ運命のもとに生れた人々があつた

それは、私の生れた會津の人々であつた。

遠い昔ではない、明治維新の會津戰爭がそれであつた。

私はいま、私達の祖父が、先祖が、どんな氣持でその戰ひに參加したかをつくづくと想ひかへして見た。

負けると知つて戰ふ人々の前途に待つものは何であつたらうか。

惡戰苦鬪の末、刀折れ矢盡き、たゞ一つ戰死といふ悲壯な現實だけであつた。

それでもなほ戰はなければならなかつた會津の人々。

戰ひの理由は、しやにむに會津を無きものにしようとする、時の勢力の蹶起にあつた。

鳥羽伏見の戰ひ以來謹愼をつゞけてゐた會津は、幾度二心なき旨を朝廷に對し建言したか知れなかつた。しかし、その建言は何れも朝廷まで屆かず是が非でも會津を押しつぶさうといふ時の勢ひのもとに握りつぶされた。

赤誠を披瀝してもなほ容れられぬ苦しさ、無念さ、殘念さ、會津は戰はずにはゐられなかつた。

もはや、戰ひは勝敗ではなかつた。會津が、いかに武士道の國であるかを、中外に知らしめること、たゞそれだけであつた。

一時に激して死を選ぶは易く從容として死につくは難い。國老萱野權兵衞

は會津一藩の罪名を背負つて自刄して果てた、白虎隊も蕾の花を散らした。

そして、本篇の主人公、郡長正（こほりながまさ）も會津武士道を護つて見事に切腹して果てた。

しかして、會津は戰ひに負けたが、今や會津の武士道は、中外にさんとして輝やいてゐる。

盟邦獨逸は、そのユーゲントに、伊太利は青少年に、以つてその範として示してゐる。

さう思ふ時、私は大戰下の日本に生れた喜びとともに會津に生れた喜びを、ひし〳〵と身に感じた。

そして、その父親の歩いた荊棘（いばら）の足跡を想ひ、熱涙をしぼつてこの一篇を

執筆した。

それを想ひ、これを想ふ時今次の大戰いかにはげしくとも、いかに困難が迫らうとも、會津戰爭の折の會津の比ではないであらうことを想ふものである。

私はいま、この小說を書いて、會津の少年武士達が、いかに困難に耐えて來たか、そして一朝有事の際に、どれだけの覺悟を持つてゐたか、いかに武士道を尊んだか、を、現在の青少年達と共に、靜かに想ひかへして見たいと思つたのである。

昭和十八年春

目次

落城のあと……一一
はなればなれ……四七
修業……七八
母の愛……九九
會津武士道……一四三
白虎隊……一七三
白虎隊讃歌……一七四
秋風飯盛山……一七六
安達藤三郎……一八八
有賀織之助……一九四
池上新太郎……一九九
石田和助……二〇〇
石山虎之助……二〇四
西川勝太郎……二〇八
法を犯すもの……二一三
青少年諸君に贈る……著者

落城のあと

多賀正

裝幀

一

「お父さまは、いよ〳〵切腹をなさることになりました。お殿様のため、また、會津藩の安泰を願つて、いままでの罪は、全部お父さまが身にかへて引受けられたのです。もちろん、そのため、朝廷におかれても寛大なお許しをいたゞき、お殿様の御身の上は、御無事といふことになると思ひます。さうなればお父さまも、さぞ御満足なことでございませう。解りましたか、お前達も、お父さまのこの御志しを繼いで立派な人間にならなければなりません」

端然と坐つた母のたに子は、乙彦、寛四郎、りう子、いし子、四郎五郎の五人を前に、かういつて言葉をきつた。

その顔には、涙のあとどころか、少しの悲しみの色をなく、反對に、はれ〴〵輝くものさへ見えた。

九才のりう子と、七才のいし子の二人には、未だはつきりとその事情が解らなかつたが、乙彦、寛四郎の二人は、互に顔を見合せて、思はず膝の拳を強く握りしめた。

「わかりましたか、お父さまは切腹なさつても、お父さまの御志しはいつまでも、いつまでもお前達の胸から離すではありませんぞ、お前達も忘れはしないでせう。戰さの最中に、みんな自刄してゐましたら、いまかうして、お父さまの御志しをつぐ人は誰も殘らなかつたはずです、しかし、あの時あのやうなことで、生命を長らへた私達親子です。あの時生命がなかつたものと思へばこれからはどんな困難にも耐えて、お國のために御奉公しなければなりません。そして、常に

お父さまのおつしやつてゐましたことをよく守るのです。立派な、會津武士となるのですよ」

聲涙ともに下る母の教訓であつた。

乙彦は心の中で

「――泣くものか、泣くものか――」

と、じつと耐へてゐた。

母の胸の底までくひ入るやうな一言一句を聞くと、何時の間にか、熱いものが眼頭に浮んでくるのだつた。

――でも、これは、決して女々しい涙ではないぞ――

乙彦は、さういつて自分自身の胸に強くいひ聞かせた。

さうすると何處か遠くで父が視つめてゐるやうな氣がするのだつた。

二

それにしても思ひ起すのは、彼の大戰爭のときのことであつた。

西軍（當時、會津側では官軍のことを西軍と呼んでゐた。會津はたんなる賊軍ではない、といふ意味で、自分達のことを自ら東軍と呼んでゐた）の軍勢が、四方八方から若松の城を圍み、それまで、日本全國の敵を一手に引き受けて、勇戰奮闘、よく半年の長い間持ちこたへた會津城も、今度こそは、最後が迫つた、と、誰にでも感じられるやうになつた。八月二十三日の朝のことだつた。

「早鐘をついたら、女、子供は全部入城せよ」

と、いふ布令が城中から仰せ出された。

城中でも既に、最後の近づくことがわかつたのだつた。

「あゝあの鐘は」

「早鐘だ」

天をにらみ、地を踏まへて、無念の齒をかみ鳴らしてゐた會津藩中の老幼男女は、すはこそ、と、城中に避難しかけた。

東北一の名城として、名高かつた會津鶴ヶ城の大手の門が八文字に押し開かれた。そこからぞく〳〵と人々が入城してる時、乙彦の家では、母のたに子が重々しい聲で、家族の者を呼び集めて口を切つた。

「お前達も知つての通り、いよ〳〵敵軍が迫りました。あのやうに早鐘が鳴つてゐます。早鐘が鳴れば、みんな城中に避難しろとの仰せ出しでした。でも、私達、女子供が大勢城へ入つてはかへつて足手まとひにならうもしれません。

人さまに、御迷惑をかけては申し譯ありません。兼ねて、お父さまから申しわたされた通り、武士は覺悟が大切だ、既に、會津の運命の決りました、いま徒に生き伸びて、生恥をさらすより一そ切腹した方が、武士らしい最後です。さあ、切腹の用意を致しなさい」

母は、唇を一文字に結んで、一わたり家族の顔を見渡した。

さすがに、誰一人、ためらうものもなく、言下に、

「はい」

「はい」

と、みんなはつきりと答へた。

父の萱野權兵衞は、會津二十三萬石、松平容保公の家老で、一方の大將として、長男の、八之助を連れて出陣した後だつた。

乙彦はその時十三才であつた、それまで、次弟の寛四郎と共に日新館へ通つて、會津藩獨特の嚴しい教育を受けてゐたのだつたが、その頃はもう、日新館は、おびたゞしい負傷兵を收容するために病院になつてゐたので休みだつた。

たちまちのうちに、庭の一隅に切腹の用意が整へられた。

先祖代々、綠濃く繁つてゐる松の木の下へ、むしろを敷いてそれ〴〵の座についた。

權兵衞の屋敷は、城中からほど遠からぬ、本一ノ丁にあつた。

遠く近く、銃砲聲がすさまじい響をたてゝゐた。

その砲聲があだかも、會津藩の最後を一歩一歩持ち運んでくるのでもあるかのやうに。

「いよ〳〵これが最後だ」

乙彦も寛四郎も氣を沈めて、袴の折目を正して坐り直した。

「これは、姉上、どうしたのでござる」

その時、父の弟の鈴木多聞が兄の家族がどうしてゐるかと氣遣ひながら入つて來た。

「これはよいところへ、實は、私達女子供が余り城中へ入りまして、かへつて足手まとひになり。お父さま達のお働きの上に、御迷惑でもかゝつては申し譯ないことゝ思ひまして、一同切腹の用意をしたところです。ちやうどよいところへ見えました。御介錯を願ひます」

母は一氣にかういつて叔父に賴んでゐるのを、乙彦達は、何の不思議も感じないで聞いてゐた。

「さやうでござるか、では、いかにも介錯致しませう」

叔父も、その場の一切の事情はすぐにのみこんだらしく、家重代の名刀の鞘を拂つて、子供達のりゝしい姿をじつとながめた。

「萱野様の御家族、しばらくお待ち下さい」

その時城中から轉げるやうに走つて來た侍があつた。

「おとめなさるは、何故か」

叔父の多聞が、きつとなつてふりかへつた。

「城中、人手少なく御難澁の様子でございます、一刻も早く照姫様の御側へ御出頭願ひます」

「照姫さまが御難澁されてゐますとは」

「さやう、一刻も早く行つてお上げ下さい」

侍は、そのまゝ次の屋敷の方へ走つて行つてしまつた。

母と叔父は、顔を見合せて、しばし思ひまどつてゐたが、

「ではすぐにかけつけませうか」

母がいふと、

「それが、宜しうござる、拙者も、引返してすぐに持場をまもります」

多聞は、拔いた刀を鞘にをさめた。そしてみんなに一禮すると急ぎ足に屋敷を出て行つてしまつた。

「照姫様が御難澁」といはれると母のたに子にきつとなつて思ひかへした。

照姫さまといふのは、城主容保公の御姉君であつた。その時、照姫さまは、身じまひもかひがひしく、城中にあつて、傷病兵の御慰問や、女達の指圖や、寸暇もないお働きの最中であつた。

それを聞いては、母のたに子も、意を飜ひさぬわけにはいかなかつたのだつた。

問もなく一家揃つて、入城したが、その時乙彦達と一緒に、この萱野家にゐた人には、後の男爵、全權大使、林權助も交つてゐた。

當時、僅かに九才の林權助が、あの時、城中からの呼出しがなかつたら、哀れ鈴木多聞の介錯で蕾の花を散らしてゐたことであらう。世の有爲轉變ほどはかり知れないものはない。

思へば、あの日こそ乙彦達にとつて、大きな試練の日であつた。そして運命を決する日でもあつた。

その日のことを思ひ出しながら乙彦はしばし眼をつむつて下腹に力を入れ、昂まる氣分をじつと落付けた。

「お父上の切腹の日は、十八日とのこと、まだ、四日ばかり間があるが必ず未練なこゝろを起してはなりませぬ」。

後四日で、自分達の父親が切腹なさるのだと思へば、會ひたからう、見たからう、たとひ一言でも言葉をかはしても見たいだらう。だが、母から、

「必ず未練なこゝろを起してはなりませぬ」

と、固く戒られては、誰一人、悲しさうな樣子さへ見せなかつた。

——父は、會津二十三萬石の、全家中を代表して、一人自若として死んで行くのだ——

再び、さう思ふと、乙彦の胸には熱いものが、みなぎりあふれた。

だが、「未練なこゝろを起してはならぬ」と、母が、自分のこゝろにもいひ聞かせてゐるであらう——と、乙彦には思はれた。そして——母は女だ、自分達は男ではないか、寛四郎、お前も未練を起してはならぬぞ——と、母のいつた通りをこゝろの中でいつて、默つて寛四郎の顏を見つめた。

肌の汗ばむやうな五月十五日の晝すぎであつた。

三

――いよ〳〵、今日は、父上が、切腹をなさるのだ――

いくら覺悟を決めてゐるとはいひながら、まだ十五才の乙彦は、その夜は、一寸うと〳〵したばかりで夜が明けてしまつた。

會津落城以來一年有餘、父の權兵衛は、久留米藩主有馬公の屋敷にきんしんを命ぜられ、乙彦達は、東京大久保の松平邸に養はれることになつてゐた。

――あゝ今頃は――父上が、どんな氣持でゐるだらうか、父上のことだから、少しも騷がず、平然と構へてゐるに相違ない――

と、思ひながらも、靜かに切腹の時刻の來るのを待つてゐるのは、どんなだらう、と、思はずにゐはられなかつた。

いつぞや、戰爭の時は、自分も、寛四郎も、九才の林權助さへも、立派に切腹の覺悟を決めたのだつた。

しかし、あの時は、若松中に、砲聲がえん〳〵としてとゞろき、小銃の音が、まるで豆いりのやうに、お城近くまで聞えてきて、もはや、會津の運命もこれまでだ――と、老いも若きも、男女の差別なく、城と運命を共にしようといふ、悲壯な決意を固めてゐたから、

「切腹をしろ」

と、いはるれば、何時でも、

「はい」

と答へることが出來たし、その通りのことが出來たのだつた。

でも、いまかうして、靜かに起き伏し出來る身で、いざ、切腹をしなければならないといふことになつたとしたら、それが自分だつたら、果してどんな氣持がするだらうか――、乙彦は、こんなふうに考へて來たが、ふと、

まだ、會津藩がそのまゝの頃、日新館の道場でははげしい劍術の修業をし、童子訓を敎へられ、その上、「ならぬことはなりませぬ」といふ、嚴しい戒を六つ七つの時から腹の底まで敎へ込まれた自分達であることに氣がついた。

「ならぬことをした時は、どうなるだらうか」

と、考へがそれに及んで來たら、すぐにこゝろの一隅で、

「切腹をしても申し譯をしなければならぬ」

と、答へた。

――さうだ、父上は會津藩が犯した、ならぬことのために、切腹して申しひらきをなさるのだ。さうだ、そして、そのために、會津一藩がお殿さまでがお命を全うされるのだ。あゝ、あゝさうだつたら自分だつて、必ず立派に腹を切つて見せるぞ――

乙彦は、いま父の切腹が、決して父一人の罪のためではなく、何萬人の人々のための貴い犧牲であるといふことを知ると、

――かはれるものならば、自分がかはつて切腹をして見たい――

と、思つたりしたが次には、母のいつたやうに、

――決して父の名を、會津の名を恥しめるやうなことはせずに、立派な人間にならなくてはならないのだ――

と、益々決心を固くした。

——父上、どうぞ安心して切腹して下さい、この乙彦も必ず立派な人間になります——

と、心の中で誓つた。

さうすると、また乙彦の頰には新しい感謝の涙があふれでるのであつた。

四

その頃

有馬邸から保科邸にうつされたおあづけ中の父の權兵衞は、同じく謹慎中の同藩の人達と靜かに語り合つてゐた。

そのうちにも、刻々と切腹の時刻が迫つて來た、と、

「失禮でござるが、一刀流の極意を御傳授申しあげませう」

と、權兵衞は、傍にゐる井深宅右衞門をかへり見ていつた。

「何と、仰せられます

と、井深宅右衞門は不思議さうにきゝかへした。

それも道理、切腹の時刻が間近くなつてゐるいまの場合、いくら一刀流の名人である萱野權兵衞のいつたことでも、瞬間、はつとしたのは井深宅右衞門一人ではなかつた。

「いや／＼、お驚きになることはありませぬ」

權兵衞は、微笑をふくんで、全く常と變らない溫和な眼をむけた。

「會津藩中で、一刀流の印可を受けたものは、木村又三郎殿、林兵庫殿、それと私の三人だけであつた。しかし、戰爭の折、木村、林の御二人は天晴討死、師範

の樋口先生さへ、未だに生死のほども判りません、さすれば我が藩中で、一刀流を受繼いで生きてゐるものは私だけで、その私も、間もなく切腹して相果てねばならぬ身であります。それでは、折角名譽の一刀流も、これきり會津から後を絶つてしまう道理、それではいかにも殘念でござる、幸ひ、井深殿は、その道の達者、お受け下さらぬか」

何といふ、奥床しいたしなみぶりであらう。靜かに落付いて、死んで行く寸前まで、殿のことを思ひ、會津のことを思ひ、更に、自分で練磨した一刀流を後世に殘したいといふねがひは、實に立派なこゝろがけではないか。

「お願ひ申しあげます」

井深宅右衞門は、思はず胸底からこみ上げてくる熱い感激に體をふるはしながら、形を正して平伏した。

「では」

權兵衞は井深をうながして起上ると、火鉢にあつた一對の竹火箸を取つた。そして一本を自分が持ち、他の一本を井深宅右衞門に渡した。

謹慎中の人を入れておく部屋には、すべて鐵物が禁じられてゐた。

その他、武器となるやうなものは、何一つおかない掟になつてゐた。

居合せた一同の者は、ひとしく固唾をのんで二人を見まもつた。

「いざ」

「おゝ」

二人は、互に正眼にかまへてじつと相手の様子を伺つた。

「おゝ」

「えい」

權兵衛の持つ竹火箸は、まるで生物のやうに自在に躍つた。

しばらく、はげしい打合の後、權兵衛は、その祕傳の説明をしをへて、しづかに座についた。

井深宅右衞門は、額にびつしよりと汗を浮べて、

「重ね、重ね有難う存じました」

と、禮を述べて座についた。

間もなく、家老の山川大藏と、親戚の北原半助が、特に面會を許されて入つて來た。

「萱野殿」

山川大藏が聲をかけると、

「永々お世話になりました」

と、權兵衛は禮をかへした、

「この度は、誠に持ちまして」

山川大藏は、家老でも上席の方で、萱野權兵衛とは、ほとんど同格の武士であつた。

——誰も責任を持つてくれる人がなければ、自分が、かうして切腹をして申し開きをたてなければならなかつたかも知れないのだ。それを萱野權兵衛が自らすゝんで引受けてくれたのだ、いはゞ自分の身替りではないか、——

實に千萬無量の思ひだつたが權兵衛は、平然として

「いや、覺悟は、既に出來てをりました」

と、いつた。

それを聞くと山川大藏は斷腸の思ひがした。

「もはや、時刻もさし迫つてをりますれば、何か御申し殘しの儀はございませぬか」

「たゞ、心殘りは、御殿様のことのみでござる」

「あゝそれならばお喜び下され、殿は御隱居、そして、血脈のものをして御家再興の御内沙汰がござりました」

「それでは殿には」

權兵衞は、ぴたりと兩手をつくと、はら〳〵と落涙した。

「山川殿、それを承りましては、もはや何の心殘りがございませう。私の死が、大死でないことがわかりますれば、それが何よりの死出の土産でござる」

あゝこの誠忠、殿を思ふこゝろの偉大さ、死してなほ、主君のことを思ふ權兵衞は、こゝに始めて安心とゝもにしばらく嬉し涙を禁じ得なかつた。

兩の肩を大きく搖すつて、男泣きに泣く權兵衞の心の中には、いま死んで行く身に何一つの未練もなかつた。

それを見た一同の人々も涙をしぼつた。

山川大藏は、つと進み出ると、ぴつたりと權兵衞の兩の手を押へた。

山川大藏も泣いてゐた。

ほどなく、時刻の知らせが來た。

權兵衞は、またもとの靜かな態度にかへり、兼ねて用意の裃を着用すると、

「では皆様、永々の御厚宜、御禮申し上げまする、この上ともに、殿の身、會津藩のことはお願ひ申し上げまする」

「萱野殿」

「權兵衞殿」

山川大藏を始め、井深宅右衞門もともに胸の張りさける思ひで起ち上り、別れを惜しんだ。

「伯父上、何か一言、御申し殘しがうかゞひたうございます」

北原半助が、袴の裾をとらへると、

「どうぢや半助、判官樣のやうぢやらうが、權兵衞は、判官樣のやうに、立派に死んでいつたと傳へてくれ、ははゝゝゝ」

さういつた萱野權兵衞は、忠臣藏の芝居へ出る判官樣が、少しの取亂したふうもなく、悠然として切腹する、そのときの姿を瞳の奥に思ひ浮べて、自分もきつとあれ以上に死んで見せよう。と思つてゐたのかも知れない。

「伯父上」

萱野權兵衞は、はつはつと笑つたが、北原半助はたうとうその場に崩れるやう

に泣いてしまつた。

この話を、乙彦は後になつて北原半助から聞いて、

——武士は、一朝事あるときは、父のやうに立派に死んで行かなければならないのだ——と、魂の底に刻みつけた。

五

會津は決して朝敵ではなかつたが、時の勢ひに押されて、遂に、錦旗を押したて、攻め寄せた薩、長、土の他三十餘藩の聯合軍に弓を引いてしまつた。

それは結局錦旗に弓を引いたのだからその罪は當然、問はれなければならなかつた。

藩主松平容保公は、降伏する時、既に、

「何萬人の人々を殺すより、自分一人死ねばそれでいゝのだ」

と心を決めて城を明け渡されたのだつた。

しかし、その殿様のおこゝろを知つた、萱野權兵衞が、どうしてそのまゝ殿を見殺しに出來るでせう。會津の武士の中には、藩祖、正之公以來、そんな卑怯な人は一人もゐなかつた。

「學問他なし忠と孝」

これが、會津の學問であつた。

「學問とは、他になにもない、忠義と、孝行をほんたうに知ることだ」

萱野權兵衞は、やはり、さう敎へられて來たし、乙彦達兄弟にもさう敎へて來たのだつた。

そして、遂に、明治二年五月十八日、燃えたつやうな新綠の色とは反對に、鮮血を流して會津二十三萬石の身替りになつたのであつた。

父權兵衞の切腹と同時に、二百二十有餘年會津に武勇をうたはれた萱野家は斷絶することになつた。

後に殘された萱野家の人々は、何れも遠い先祖の姓を取つて郡と名乘ることになつた。

乙彦もその時始めて、郡長正と名乘ることになつた。

さて、今までは、會津藩士の主だつたものはそれ〴〵謹愼を命ぜられたり、あるひはおあづけになつたりしてゐたが、萱野權兵衞一人の切腹によつて、さしもの會津戰爭も一段落といふことになり、會津二十三萬石は取上げられ、今度は、青森縣の片隅へ三萬石を與へられて移封されることになつた。

もはや、會津は昨日までの會津ではなくなつてしまつた。

東北一の名城として名の高かつた鶴ヶ城も、あの戰火のために所々が傷み、修復の手ものべられてゐず、上下、一體となつて戰つた城下の人の總べては、百姓町人まで、最後の血の一滴まで捧げ盡してしまつた後の貧困は言語に絶し、見るも無慘な有樣であつたが、そこにも不倒不屈の會津魂はたくましい建設の曲をかなでてゐた。

戰火に血ぬられた山野には新綠が匂ひ、田畑には、鋤鍬を持つ男女の影が、日增しに增えていつた。

半年とすぎ一年とすぎ、極度の不安から解放された會津若松市民の上に、萱野權兵衞が、主家の罪を一身に引受けて、見事切腹し、主家の罪名を拭ひ、新しく、靑森の片主舍ではあるが三萬石で移封され、僅かに命脈を保つことを得たといふ報をもたらされた時、

「あゝ、さすがに國老萱野樣だ、御立派な最後を遂げられたものだ」

と、誰も彼もが讃嘆の聲をあげた。

そしてまた、さすがの會津戰爭も、これで一段落がつき、世は御一新となり、新しい官員樣が、ぞく〳〵と會津の地に入つて來た。

いままで慈父のやうに慕つて來た容保公始め家中の人々の、影を見ることも出來なくなつたことは何といふ淋しいことであらう。

變れば變る世の中だ、人々は涙をのんで榮えに榮えた昔の會津をしのんだ。

その頃、

その名も郡と改姓された萱野一家も、母や幼ない弟姉達は、先祖代々住みなれた會津の地に殘り、乙彥改め長正は、叔父の三淵隆衞が大阪にゐたのでそこへあ

づけられることになつた。

乙彦は兄弟一番、學問に熱心で、劍道も、日新館中での名手の一人だつた。

二つも三つも年上の人達が彼のはげしい太刀先にはかはしかねて、見す見す敗北をとることが少なくなかつた。

會津戰爭の時は、年が少なかつたので遂に白虎隊にも加はらなかつたが、それを殘念がつて、きり〳〵と齒を喰ひしばつて、兄の出陣を見送つてゐた。

「お前も、お父さまの子供だ、必ず立派な人間になつておくれ」

いよ〳〵今日旅立つといふ朝、母のたに子は、さすがにしんみりといふのだつた。

「いつて參ります」

長正は、いつも口かずは少ない方だつたが其の日は取わけ口少なにいつた。

「兄さん」

弟の寛四郎は、打ちつゞく不幸、しかも、いままた、兄の長正に別れては、これから、ほんたうに相談相手になる人もなくなる、と思ふと、淋しさがこみ上げて來た。

それでも、父の死に對して、たゞそれくらゐのことが何であらう。そんなことを口に出しては會津武士の名折れである——と、たゞ一言

「兄さん」

と呼んで顏を見上げた。

緣先に腰をかけて、草鞋の紐を結んでゐた長正は、

「寛四郎、お互にしつかりやらうな、お互に」

起ち上つて、二つばかり續けざまに弟の肩をかるくたゝいた。

「やります、兄さんに負けませんよ」
「さうだ、負けてはならぬのだ、母さまや、みんなを頼んだよ」
一度口を開くと無口に似ず元氣がよかつた。
「では氣をつけて」
「御氣嫌よう」
長正は、父ゆづりの刀を一本腰に、足どりも亂さず玄關を一歩踏み出した。
長い間會津の風習になつてゐたことは、旅立ちの人を、何處までも見送ることをしないことだつた。
「何處まで送つて行つても結局は別れるのだ」
と、いふ實際の問題として、旅立つ人を送つて行けば行くほど、なほさら未練がまして來て、別れが辛くなることを嫌つたのだつた。

「武士は散り際」といふ言葉があるけれど、旅立つ人も、潔よく　その場で、
「さらば」
と、別れた方がどんなにさば〳〵してゐるか知れなかつた。
さうすればつまらない間違ひも未練もおこらない、それが會津の一つの氣風であつた。
「さやうな女々しい振舞をしてゐるひまがあるなら、學問、武藝にはげむことだ」
さう敎へられた、しかもその學問は
「學問他なし忠と孝と」
であつた。
未だ十五才の長正は、誰にも見送られず、たゞ一人、大阪さして長い、長い旅にのぼつた。

思へば、これが郡長正にとつて、親子兄弟の永久の別れとなつたのであつた。
六月の陽は熱く、彼の頭上にさん〳〵と降りそゝいだ。
大阪へついたら、叔父のもとで、しつかり學問ををさめよう——、長正はこゝろに決して旅立つたのだつた。
その前には、起伏幾山川（きふくいくさんせん）、東海道の難路が横たはつてゐた。
「學問他なし、忠と孝」
長正は、心の中で幾度もくりかへした。
——父の名を恥しめないやうに、そして會津武士の面目をも——

はなればなれ

一

「は、この人が萱野殿の御子息かな」

大阪へ着いて、五日目、叔父のもとに出入してゐる、もと、會津の軍醫であつた幕臣松本良順に引合されると、その人は何かこゝろに感ずるものがあるやうに、さういつてつく〴〵と長正の顔を見つめた。

「何分宜しくお願ひ申し上げます」

長正はまるで大人のやうな口調で松本良順の前に頭をさげた。

「なか〳〵聰明さうな方ですな」

松本良順は、眼まぜもせずにまだ長正を視つめてゐた。

「は、自分の身内のものを、ほめるのもどうかと思ひますが、十人並に學問も武藝も仕込んであります。でも何分若年者のこととて、いまだ西とも東ともわかりません」

叔父の三淵隆衡は、さういふふうに說明したが、長正は十人並どころではなく拔群であつた。

會津の氣風の一つとして、自分の身内のものを他人の前でほめちぎることは、これまたいやしいものゝ一つとされてゐた。

「自己宣傳は、素町人のする業である」

と、誰も彼も信じ、謙讓こそたゞ一つの武人の誇りとされてゐた。

商人がものを賣る場合には、嘘八百を並べたてゝ盛んに宣傳をする。それは、見てゐても全くあさましいはなしで、武士がさやうな卑しいものと同じ行動がと

れるか、武士は宣傳よりも實力である――といふ理由からだつた。

決して自分の身内や、自分の自慢をしないことになつてゐた。

これは決して會津一藩の氣風とすることは出來ない、當時の武士階級はすべてさうであつたやうであるがたゞ、會津は、特にそれを重んじたゞけである。

事實、いくら武藝の自慢をしたところで、眞劍をもつて相對した場合に、

「勝負は時の運」

などといふ言葉もあるが、これは、決して正しい見方ではなくて、ある場合の一二の例外を見ては、そんなふうにいつた人があるだけのことで、實際は、

「强いものが勝つ」

「實力あるものが勝つ」

といふことになるのであつた。

學問の場合は多少別のこともいはれるが、現在のやうに、盛んに自己宣傳をしたり、吹聽したりして歩くのは、人心の惰落といふことがいへよう、いはゞ、ひとしく武士の町人化であるともいへる。

會津は、いまでもそれを嫌つてゐるのだから、當時は、いかに嚴しかつたかは伺ふに難くはないのである。

三淵隆衡から、かう紹介されると、松本良順は、

「いかにも、いかにも」

と、深くうなづいた。

そして、

「失禮ながら、大阪へ、いかなる御決心でお出になりましたかな」

いまは既に、萱野家は斷絶したとはいひ、やはり、國老萱野權兵衞の子息にか

はりはなかつた。

松本良順は言葉に失禮があつてはならないと氣を配りながらこんなふうにたづねた。

「學問ををきめたいと存じて參りました」

「いかにも、いかにも」

うなづきながら、松本は更に、

「そして、學問についての御覺悟は」

「忠と孝」

長正はきつぱりと答へた。

「ほう、いかにも、いかにも」

松本は、膝を叩いて、飛び上つた。

松本は、一眼見て、この長正が好きになり、次に、三淵隆衡から紹介され、更に、學問の覺悟をたづねたのは、もし、三淵隆衡が承知したなら、自分であづかつて、みつちりこの少年に學問を仕込んで見たい希望があつたからであつた。

さうしてこの長正に立派な人間となつてもらへば會津一藩の犧牲になつて死んで逝かれた、國老萱野權兵衛に對して、せめてもの御恩報じにもなることである、と、かう思つた。

ところが、言下に

「忠と孝」

と、長正が答へると飛び上つたのは、

「學問他なし忠と孝」

と、二百有餘年、藩祖正之公以來の會津精神の根源を、そのまゝ長正は、實行

しようと、はつきり答へたからであつた。

松本良順は、自身醫者ではあつたが、立派な國學者だつた。

早速、自分の意中を三淵隆衡に話すと、勿論、何の異存もなかつた。

長正にたづねたが、學問をするために故郷を後にした長正にも無論異存のあらうはずはなかつた。

「では何分ともにお願ひします」

と、その日はそれで、松本はかへつた。

さて日を改めて、いよ〳〵松本家へ長正がうつらうとしてゐるその前日、急に、

「郡長正を、小倉藩の小笠原家にあづけ育德館で勉强させるやうに」

と、いふ報せが突如として舊主、容保公のもとから三淵家へもたらされたので

あつた。

舊主、容保公は、自身の不始末から、二百有餘年も榮えつゞけた松平家が、朝敵の汚名をきせられ、會津一藩は、今や路頭に迷ふやうな有樣になつて、子弟の教育も、自由にならぬといふことを、いたく心配されて、自身、親戚筋である小笠原家へ藩中の秀才を選び教育を依頼された。

小倉藩では、悲運にある、容保公のたつての御依頼なので、大勢は困るが小數ならば、お引受しませうといふことになつた。そこで舊藩の主立つた人々が、愼重に協議した結果、八名の少年が選ばれたのである。その筆頭がいま、大阪の叔父のところへ着いて間もない郡長正であつた。

郡長正を筆頭に、長正の從兄である、神保巖之助、木村新治、馬場與三郎、佐瀨豐太郎、齋藤德治、德力德治、五十嵐佐內の八名であつた。

その報せが叔父のもとへ屆いたのであるから、一足のことで松本良順との話は食ひ違つてしまつた。

舊藩主の配慮に對して、何とて否やがありませう。すぐに謹しんでお受けしなければならなかつた。それで、切角決つた松本良順のところへ行くといふことは全く沙汰止みとなつてしまつた。

長正にとつては、小倉藩の小笠原家へ遊學に行くといふことは、實に名譽のことであつた。

紛骨碎身、努力を惜しまず、あつぱれ、ものゝふの道を極めようと、また決意を新にしたのであつた。

實際、小笠原家は、昔から武で鳴る、名譽の家であつた。

二

一方、山川大藏のひきゐる會津家中の武士達は、越後の新潟港から、はるゝ北の涯の青森の片田舍へ落ちて行つた。

そこだけが、今は昔にかへるべくもない、會津藩士達の、たゞ一の天恩の浴す土地であつたのである。

會津藩といふのは、藩祖正之の時、當時より二百二十年前既に、前領主、加藤明成の四十萬石から二十三萬石に減らされたところであつた。

藩祖正之公はそこの領主として入國されたのであつた。

その時、取つぶし同樣になつた加藤家の舊臣の中には、祿に離れて、その日の

暮しにも困るものが大勢あつた。

それを見た正之公は、

「出來るだけ、厚遇を以て召かゝへるやうに」

といつて、あまねく浪人達を召かゝへるやうにしたのであつた。

人間何が一番困るといつて、生活に困ることが一番悲しいことだ、生活に困つたために、あたら人材も乞食同樣になりさがる場合もある。わけて、自分は德川將軍の緣戚であつて見れば、なほさら前領主の家臣をそのまゝ見殺しにすることは人道にもとる——と考へられたのであつた。

會津は二十三萬石の他に、將軍家の直々の領地が五萬石あつた、それが正之公があづかることになつてゐたから、結局は、二十八萬石のわけであるが、それにしても、もとの四十萬石から比較して、十二萬石の領地を取あげられてゐるのだ

から、それに、四十萬石時代と同じ家來を養ふには、當然のことゝして、財政的に窮屈にならざるを得なかつた。

しかし、それを耐えて、切り拔けてやるためには、會津の武士は、上下一體、質實剛健、進取の氣象をもつて事にあたつた。

國防第一、質素第一、會津には何一つゆるがせにしていゝものはなかつたのである。

それぞれ、武士の家庭に入つて見ると、相當の偉い武士の家庭でも、奧方や、娘達まで、何か內職をしてゐることがあつた。そして武備にあてたのだつた。

かつて、容保公が、京都守護職として、六ヶ年間、當時勤王佐幕が入り亂れて百鬼夜行の容相を呈してゐた京都治安の大任に當つてゐた時も、二十三萬石の小藩としては、隨分苦しいことがあつた。

それまで、京都守護職は、五六十萬石の大藩か、京都近接の地の利に於てすぐれてゐた藩主のみが選ばれてゐたが、當時、尊王攘夷、開國、討幕、佐幕と、天下は、それまでの太平の夢を一ぺんにくつがへしたやうに騒然となつて、もはや京都守護職といふのは、大藩小藩の問題にとらはれてはゐられなくなつた。

つまり、何をするにも、天下の信望と、人物本位といふことになつたのである。

その時特に選ばれたのが會津藩主、松平容保公であつた。

大命を拜し、容保公は六ケ年の長い間、身命を賭して孝明天皇に仕へ奉つた。

そして、天皇の信任は益々あつく、幾度も感狀を拜し、畏くも恩賜(おんし)の御衣(みころも)まで賜つたのであつた。

藩主が自らを忘れて奉職してゐる時、その下々の者が、どうしていゝかげん

なことをしてゐられよう。全藩一體、國もとに殘つた妻子は、自分達の着るものや身につけるものまで儉約して京都にゐる。夫や兄弟に送つたといふほどだつた。

それだのに、時の勢力は恐ろしいもので、それだけ天皇に信任があり、それだけ盡忠の誠をつくした容保公が、一朝立場をかへれば、朝敵の汚名さへも着せられなければならなかつた。

それでも會津全家中の人々は藩主のためには一身を犧牲にしてもなほかへり見なかつた。何といふ信頼であらう。何といふ情宜に厚い人達であらう。

だが、さすがの會津藩の人々も、今度は、二十三萬石を、一たゞの三萬石として、しかも北の涯ともいふべき青森の片田舎へ押しこめられてしまつたのである。

家老山川大藏は、武士を捨てて會津の親戚縁者を頼つて殘る者は會津に殘し、身の振り方に困る者と、與へられた、領地を切り拓くために、それ〴〵要路の人を伴つて、はる〴〵と海を越えて渡つたのであつた。

荒れ果てた土地、吹く風さへも寒々と、果してこんなところで米が實るだらうか、と思ふやうなところだつた。

昔のやうに、領民から上納米を取りあげて、武士が遊んでゐては申し譯ない、いや、いくら取あげて見たところで、この土地では、三萬石はおろか、二萬石も取上られるものではない、そこの百姓達の作るもの全部を取上げて見たところで知れたものである。

仕方なしに、山川大藏は、自ら藩士を指揮し、大刀を鋤にかへ、槍を鍬にかへさせて、荒野開拓の第一歩を踏み出したのであつた。

そしてかりに、そこの名を斗南藩と名づけた。

郡長正は、斗南藩士として小倉の小笠原家へ送られることになつたのであつた。

かうして、會津藩の子弟は、はなれ〴〵になつて生きなければならなかつた。

柴五郎陸軍大將などもその時、はる〴〵と海を越えて北の涯に行つた一人だつた。

三

「おゝ巖之助」

「あゝ乙彦か」

別れて何年になるだらう。世の常の近くにゐる從兄であれば、何時でも往來が出來ようものを、巖之助と長正は、

——別れて何年になるだらう——

と、そんな氣持でいつまでもいつまでも二人は顏を見合はせてゐた。

「おれはもう乙彦ではないぞ」

しばらくして長正がいつた。

「さうか、さうだつたな、長正か、乙彦よりも長正の方が、强さうだなあ」

「あはは〻」

「あはは〻」

さういつて二人はまた顏を見合はせ、聲をたて〻笑つた。ほんたうに、何年振りと思ふほどだつた。

戰爭前は、一歩も會津の外へ足を踏み出したこともなかつたのが、あの戰爭が終つて大阪へ來て、いままた九州へ旅立つ、全くあはたゞしい月日が、また〻く間に過ぎてしまつた。

會津が無事であつた頃、毎年秋になると巖之助と一緒に、名物の身不知柿に舌づつみを打つたのは、それこそ、もう十年も前のやうな氣がした。

「しつかりやらうぜ」

「さうだ、しつかりやらう」

二人の口數はすくなかつた。何時會へるか全く豫想さへ出來なかつた巖之助始め、七人の友人に會つたのだから、長正の胸の中は、ふるへるほど嬉しかつた。

だが、長正は、父の權兵衛に似て、決して悲しみも喜びも、露骨に表面に現さなかつた。

輕々しく喜びや怒りを表にあらはすものは慎しみの足りないものだ。
これも會津の子弟教育の一つになつてゐた。
八人の少年達は、十八歳の嚴之助が年長で、十五歳の長正は一番年少者であつた。
一先づ長正のゐる大阪で集り、大阪から船で小倉へ行くことになつた。
「では、元氣で、會津武士の面目のために、一生懸命にお願ひします」
送つて來た三淵隆衡や、松本良順などに、さういつて勵まされると、八少年の心は、希望に躍つた。
「武藝でも學問でも、何で小笠原のへろ〳〵共に負けるものか」
と、戰前既に敵をのむの觀があつた。
別に小笠原藩　敵にしたわけではないが、學問の相手としてのことである。

「行つて參ります、色々お世話になりました」
長正達は互ひに挨拶の言葉を殘して船に乘り込んだ。
長正が船に乘る姿をじつと眺めてゐた松本良順は、傍の三淵隆衡をかへり見てしみ〴〵といつた。
「あの方は大物になりますよ、萱野殿に、負けない大物に」
「……」
三淵隆衡も、何となくそんな氣がしてゐたところだつたが、たゞ默つてうなづいた。
文字通り紅顏の美少年で犯し難い威嚴をもつ郡長正は、誰の眼にもそんなふうに見受けられた。
生れて始めての船、

四面、山に圍まれた會津に生れたこの八少年は、海といふのは、全く今度の旅が、始めてで、いまゝでは遠くからながめたばかりだつた。

大阪港を一歩港外へ出ると、そこは名にしあふ瀬戸内海である。

八人の少年は、めづらしさにしばし瞳をうばはれた。

つひ三四年前までは、騒然として、何時海戰になるかわからないやうな空氣のはらんでゐた大阪附近の海も、今は、全く平和にかへつたふうで、そこかしこに白帆が、鏡のやうに凪いだ海面を我がもの顔に浮んでゐた。

島が見えた、島の上には人家が見えた。

六月も終りに近い朝の太陽は、小波を黄金色に染めた。

全く繪に書いたやうな美しさだつた。

「きれいだなあ、長正」

きつきから、默つて海面を見つめてゐる長正の肩をぽんと叩いたのは巖之助だつた。

「うゝ、きれいだ」

例によつて相槌を打つただけで、更に感動の色も現さない長正だつた。

四

「お前は、伯父上が、井深先生に一刀流を傳授されたことを知つてゐるか」

巖之助は、眞劍な顔をして話しかけた。

「知つてゐる」

長正は、太く短く答へた。

「拙者は、一度井深先生にお目にかゝつて、教へを乞ひたいと思つてゐたがたうとう殘念ながら教へを受けずにしまつた。小笠原家へ行つたら、武道名譽の家だから、きつと武道の試合があるに決つてをる、その時みす〳〵破れを取るのは會津藩の名折だから、何とかして、一刀流の免許の腕がほしかつた」

會津の少年達にとつては敵に破れるといふことくらゐ殘念なことはなかつたのである。

嚴之助は、會津少年を代表したやうに、昂奮していつた。

「嚴之助、さう今から殘念がるな、それに、お前の腕では未だ〳〵一刀流の印可はとれないぞ」

「な、なに」

仲のいゝ從弟ではあるが、年下の長正から、かういはれると、思はず聲が高くなつた。

「いや、さうむきになるな、しばらく會はない間に、お前の腕はどれだけ上達したかしれないが、まだ〳〵修業の餘地があらう」

長正は、自分の信ずることは平然として誰の前でもいつてのけた。

これは決して自己宣傳でもなければ空威張りでもなかつた。

「人間は、卑屈になるなかれ」

これも會津の教育の一つだつた。

卑屈と、愼みとは、自から意味が違つてゐた。

「さうか、まだ、拙者ではむづかしいか」

嚴之助は、長正のかうした正しい主張の前に、惡びれずに考へ直した。

年は若いが日新館時代から、父の血を繼いだ長正の腕は、非凡だつた。

「父上は、拙者でさへも相手にしてをられなかつた、教へを乞ふと、「そのうちにわかる」と申された」

「お前でもさうか」

巖之助は、暗い顔をした。

「でも、小笠原藩のものを恐れるのは意氣地がない、闘つても見ないうちに恐れる必要はないぞ」

巖之助は、年少の長正に、何か教へられた感じだつた。

しかし「闘つても見ない相手を今から恐れる必要はない」といふ長正のいふことはほんたうであつた。

闘つて見ないうちに相手を恐れるやうでは、どうして、會津藩が全國三十餘藩の大軍を向ふにまはして、孤軍奮闘、半年以上もどうして戰ひつゞけられたら

う。それを戰つて戰ひつゞけた會津武士には、殉忠報國の一念以外、恐ろしいといふものがなかつたのだ。

「恐れる必要はないか」

巖之助はきゝかへした。

「ない」

長正は、きつぱりといひ切ると、また眼を海面に向けた。

かうした落つきと、不敵さは、まるで一軍の將といつたかたちだつた。

「小笠原の者は恐れる必要はないかな、木村君どうだ」

巖之助は、いく分てれくさくなつて、木村新治に駄目をおした。

「拙者も、長正君の、いふ通りだと思ふな」

木村新治の父も一刀流印可の名譽の達人であつた。

かういつて言下に答へるのを聞くと、心配してゐた巖之助一人が、意氣地なしのやうに見えた。

しかし、それを聞いた巖之助は嬉しかつた。

この二少年の意氣が頼もしかつたのだつた。

最年長者として、別に約束があるのでも、申しつけがあるのでもないが、この七人の束ねは自分がしなければならないといふ責任を巖之助は感じてゐたのだつた。

一、年長者のいふことを背いてはなりませぬ。

一、年長者には御辭儀をしなければなりませぬ。

これは、藩祖正之公以來、何時からともなく定められた、會津の童子訓の中にあるもので、六歳七歳の頃からちやんと教へ込まれ實行させられたものであつ

た。

年長者のいふことに背くなといふ以上、年長者だけが平然として威張るだけ威張つてゐればいゝといふことは絶對にないはずだつた。

更に、年長者には御辭儀をするといふのは、とりもなほさず、年長の禮くつくすことであつた。

このやうにして、年少者から、禮を盡してもらう以上、年長者は、また年少者に對しては、それだけの責任を持たなければならないことになるのである。

幼年時代から教へ込まれた、この精神は、何時の場合でも、會津人の胸の中には渦をまいて燃えさかつてゐるのであつた。

修

業

「はる〳〵會津からようこそ御入來」

とばかり、小倉に着いた時の、小笠原家の歡迎振りは大變であつた。

一時、朝敵の汚名を着せられたとはいひ、會津の眞意が何處にあつたかは、知る人ぞ知る、緣戚關係にある小笠原家で知らない人は一人もなかつた。

しかも、選ばれた八人の父兄は、萱野權兵衛始め、みな、會津のため、武士道のために立派に働らいた人々のみであつた。

「あつぱれ英雄の子弟よ」

と、こゝろある藩士達は、この八少年に對するに全く厚い禮を持つてした。

八人は間もなく、小笠原藩校、育德館の寄宿寮に入つた。

狹いのを特に藩公の賴みで入れてもらつたので、その寮では、四疊半の部屋に二人、六疊へ三人といふ割當で、長正は、巖之助とともに四疊半をあてがはれ

た。

戰爭前は、何れも千石以上の武士の若樣であつた、長正や巖之助は、家老の若樣で、いくら財政が豐かでないとはいひながら、四疊半の狹い部屋に二人もおし込められるといふことはなかつた。

だが、今は敗殘の身、どうしてそんな我がまゝがいへよう。

四疊半の部屋も、かう思ふ時、まさに天國の感じがした。

破れてもなほ、藩公の厚い情によつてかうして自分達を勉學させてもらへるのだ、と——思ふと、自分達こそ、何といふ有難い殿樣のもとに生れたものなるかなと、感謝の涙が頰をぬらした。

これはひとりこの八少年だけではなく會津藩中には、あれだけ悲慘な戰火に見舞はれながらも、殿を恨んで死んだ人もなかつたし、殘された家族も誰一人とし

て殿を恨むものはゐなかつた。

しかも、風光明眉、はるかに、英彦山の秀峰をのぞみ、今川、枝川の清流は相たづさへて周防灘にそゝぎ、松林のつゞく丘陵が何處までものび、始めてそれを見た少年達は、ふと、會津の松林のつゞく飯盛山を連想した。

そして懐しさに胸をふるはした。

氣候も違ひ、山の形までが違ふなかに、これからどんな身を削る修業も、必ずなし遂げるべき誓ひを新にした。

「巖之助どうした、さう机にばかりかぢりついてゐるものではないぞ、少しは外にも出て見たらどうだ」

「全くだ神保君、そんなに机にばかりかぢりついてゐると、机が泣くぞ」

さういつて連立つて部屋へ入つて來たのは、長正と五十嵐左内だつた。

「さう惡口をいふものではないぞ。俺には俺の考へがある」

「勉強するのはかまはぬ。しかし體に毒だ、折角こゝへ來て、體を臺なしにしたのでは、いくら勉強しても、何にもならんではないか、たまには外へも出て見ようよ」

長正は、この二人の問答を笑ひながらながめてゐた。

「さうか、では出て見ようか」

「よし行かう」

巖之助は、左内の言葉に從つて、讀みかけた本をふせて起ち上つた。

「さあ、いかう」

三人は肩を並べて廊下の階段をふんで玄關から外へ出た。

早春、といへども三月の終りになると、南國の櫻はちらほらとほころび初めるのだつた。

もう、八少年がこゝへ世話になつてから一年近くなつてゐた。

育德館の校舍の建つた錦ヶ原の木立の間の櫻も、白いものが、二つ三つづゝ梢になりさがつてゐた。

「もう櫻が咲いた」

眼敏く見つけた五十嵐左內が雲間にのびた櫻の梢を見上げた。

「早いなあ、まだ會津だと時々雪が降るのに」

巖之助は、心もち體をくねらせると、はるか東北の空をなつかしむやうに見上げた。

「いつ見ても櫻はいゝな」

「うむ」

左內はじつと櫻の木の下へ立つたまゝ正に開かんとする、薄くれなゐの蕾を見てゐた。

——俺達も蕾なのだ、人生の春が來たら、一時に、ぱつと芳ばしい花を開かなければならないのだ——と、こんなふうに考へてゐたのだつた。

「長正、思ひ出すぢやあないか、お掘端の櫻を、あの中には梅も桃もまぢつてゐたな、それがみんな一緒に咲いた、全く燎亂たるものだつたなあ、故郷の花は」

默々として行動だけをみんなと共にしてる長正に話しかけた巖之助の瞼には、鶴ヶ城、本丸正面の爛滿たる花々が浮び上つてゐた。

「さうだつたな、だが、今でも櫻だけは殘つてゐるだらう」

長正は、

「今では櫻も枝が千切れて花をもつかどうか」
と、いはうとして、それではまたみんなの心に嫌な思ひをさせるやうになると思つてあはてゝ言葉をひるがへした。
しかし、こゝろの中では、
――すさまじい銃砲彈に、枝をちぎられた櫻が果して、どれだけ花を咲かせることが出來ようか――と、ひとりで悲壯なものをかみしめてゐた。

一

行くに與なく歸るに家なし
國破れて、孤城雀鴉亂る、

治は功を奏せず戰ひ略なし
微臣罪あり、復何をか嘆かん
長正は、我れと我が心をひきたてるやうに、故郷の大先輩秋月俤次郎の詩を吟じた。
朗々たる吟聲は、ほんのりとかすんだやよひの空に響き渡つた。
「この詩をきくと、俺はもうたまらん」
左内は思はず唇をかみしめた。
「全く、これは秋月先生のこゝろばかりではない、會津藩全體のこゝろだ」
「この上ともにやりぬかうぞ」
「うん」
三人は、互に顔を見合せて、につこりと笑つた。

と、

治は功を奏せじ戰ひ略なス

微スン罪あり、何をか嘆かん

うつすらと暮色に包まれた樹立の中から、會津なまりを眞似た吟聲が、意地惡く聞えてきた。

そして、その次には

「あつははゝ」

「あつははゝ」

と聲を揃へて人を馬鹿にした笑聲が聞えた。

「よし、あいつらだな」

五十嵐左内は、きつと刀の柄に手をかけて、聲のした方角を睨みつけた。

「さうだ、重ね重ね意地の惡い奴等だ」

巖之助も憤りを面に表してゐた。

長正は、相變らず、默つて立止まつた、

この遊學の八少年が小笠原家のお覺えも目出度、しかも揃つて、頭もよく腕も達者なところから、同じ年齡の小笠原の子弟達は、ねたましさのために、折にふれては、意地惡のかぎりを盡した。

この頃では、面と向つてさへ惡口をさゝやくほどだつた。

その度に、

「用捨はならぬ」

と、猛り立つ友人を、何時も長正は引とめてゐた、

「何故止める」

と、いふと、

「我々は、喧嘩をしに來たのではない、勉學のために來たのだ、こんなところで喧嘩をしても誰も認めてくれはせぬ、それでは、大殿に申し譯がない、辛いことをやり遂げるのも一つの修業だ」

といふのだつた。かうして最年少者の長正は、いつでも事喧嘩に及ぶと兄のやうな役目を負はされた。

さうして兄のやうな寛容さを示す長正のこゝろには、何時でも會津藩の爲に身を殺していつた父を思ひ出してゐた。

父を思ひ出せばどんな苦しいことでも我慢することが出來るのだつた。

いま會津辯の詩吟をやつたのもその一つのあらはれであつて、長正は詩吟が上手で少しもなまりなどはなかつた。

これはあながち、長正の場合だけではなしに、ひどいどもりが唄をうたうと、すらすらと難しい文句を唄へこなす、といふやうなところから見ても、長正の詩吟に、少しのなまりもないといふことはうなづけることだつた。

これは、明かに小笠原藩の少年達が、ねたましさの餘り喧嘩を賣るためのいやがらせであるに相違なかつた。

「おい待て」

左内は、たうとう走り出して怒聲を浴びせた。

詩吟のまねだけならば、兎も角、大聲あげて笑はれては、もうぢつとしてゐられなかつた。しかも相手はすぐ眼と鼻の間にゐるのである。

「こら、小笠原の意氣地なし、待たんか」

左内は、刀の柄に手をかけて、一つ飛びに彼等の面前に立ちはだかつた。

「おい、五十嵐君待てよ、まあいはしておけばよいではないか」
後から、嚴之助と、長正が、走りついて聲をかけたが、左内は、憤りに肩を波打たせながら三人の小笠原藩の少年達を睨みつけてゐた。
「意氣地なしとは誰にいふ」
「勿論、貴樣達だ」
「おいたちのどこが意氣地なしだ」
どこがと、問ひつめられると、とつさには名答が出來ずに、左内はぐつとつまつた。
「ほら見ろ、おはん達が餘ほど意氣地なしだらう」
「どこが意氣地なしか」
「どこがといはんとも、死におくれぢやろが」

「な、な、なんだと」
左内が、たまらず、刀の鯉口をぶつつりと切らうとしたとき、
「まあ待て待て、俺達は、いかにも死におくれだ、死におくれに間違ひはない」
長正は、中へ割つて入つて、左内をおさへるとかういつて、二足三足、左内を後へおしもどした。

三

「死おくれを自覺しとるわい」
小笠原の少年が、また憎まれ口をたゝいた。
「決して腹をたてるなよ」

長正は、もう一度、左内にいふと、巖之助に向つて今度は、
「巖之助、俺は一言、小笠原の連中に聞いて見たいことがあるが、聞いてもいゝか」
「いゝ」
巖之助は言下に許した。
こんな場合でも長正は、長幼の禮を失しなかつた。
「君達は小笠藩の者か」
巖之助に「左内を頼む」と眼顔で知らした長正は、くるつと體を廻すと、小笠原藩の少年達の眞正面からかういつた。
「君はどこか、會津か、人の身元をたづねるのに、自分が名のらぬ法があるか」
三人のうちで一番背の高い、口もとに凄味のある、十七八歳の少年が威高だけ

にかういつた。まるでかみつくやうないひ方だつたがそれは當然の理であつた。
「いかにも、俺が惡かつた、俺は、會津藩の郡長正、あれは、神保巖之助と、五十嵐左内だ」
自分の惡いことは、あつさりあやまつて、自分達の姓名を名のると、長正は、たゞでは決して引さがらんぞ——といはんばかりに、容を改めた。
「おい達はいかにも小笠原藩だ、おいは、近藤市太郎、これは、滿田次郎吉、これは、市橋宏だ、覺えてゝもらはう」
背の高いのが、左右の二人の姓名を告げると、傲然として腰の大刀にそりを打たせた。
「では聞くが、俺達は、いかにも、君のいふ通り死におくれかも知れない、全く慘めな有様だ。藩公にお願ひして、食客同様にしておいてもらう身分だ。しか

し、俺達は、君達から餘計な同情をしてもらはうとは思はぬ、藩公同志が、決めて下さつたから來てるまでだ、死におくれは死におくれでも、會津武士は、そんなあさましい性根には育つてをらぬ、だが、さうだからといつて、一々眼の敵にして、我々の弱味につけこんで嘲笑するのが、武道名譽の小笠原家の禮儀か、それが聞きたいのだ」

かう正面から向つて來られては、さすがの近藤市太郎と名のつた肥大漢もぐうの音も出なくなつた。

「……」

相手は、しばらく考へてゐたが

「我々は、何も人の弱味につけ込んで、嘲笑などはせん」

「それは眞實か」

「小笠原家には舌の二枚ある片輪者はをらぬ」

「眞實だな」

長正は、念をおした。

「くどいな、嘘はいはぬといふに」

近藤は、何か長正に威壓を感じながら、あはてゝそれをおしかくすやうに、さういつて肩をそびやかした。

あたりは、暮色がだん〳〵濃くなつてきた。

「それを承はつて安心しました、失禮しました」

長正は、言葉をやはらげて、今度は嚴之助と左内の方を振かへつて

「聞く通りだ。小笠原藩には、人の弱味につけ込むやうな、そんな卑怯者は一人もをらんとのことだ、今までへんなことをいひふらした奴等は、あれは小笠原藩

の人間ではなかつたのだ、歸らう」

長正は、さういふと先に立つて歩き出した。

後には、小笠原藩の三人の少年が、呆然として立つてゐた。もはや、惡口をいふひまもなかつた。

「長正、お前は、劍も達者だが、口も達者だな」

寮の近くへ來てから、巖之助は、感にたえぬといふふうにいつた。

事實、それまで長正が人と口論したことは一度もなかつた。

「全くだ、、俺は恥しくなつた」

左内は、自分の短氣をこゝろから恥じてゐた。

「たが、困つたことになつたなあ、今日は幸ひこれだけですんだが、あいつらは、きつと今に仕かへしに來るに決つてゐる。が、そんなことばかり心配してゝ

も仕方がない、兎に角勉强しよう、劍道も一つしつかり磨かうよ」

かうした兩藩の少年達の對立のために、僅か二ヶ月後には、切腹して果てなければならないといふことは、知るべくもないが、かうした對立狀態を一番心配したのは當の長正であつた。

この話は誰いふとなく、何時の間にか育德館内に知れ渡つてしまつた。

それが知れ渡ると、小笠原藩の連中の態度は露骨ではなかつたが、ます〳〵敵視しだした。

「何か折があつたら、必ずやつつけてやるぞ」

と、思つたに違ひなかつた。

さうなると、會津の八人も油斷してはゐられなかつた。全く必死の勉强が續いた。

「机にばかりかぢりついてゐると机が泣くぞ」

と、いつて巖之助を笑つた左内も長正も机を離れない日が多くなつた。

この勉强振りを見て、一番好感を持つて特に長正に親切にしてくれたのは、小笠原藩が、當時月給を百七十五圓も出して雇つた、オランダ人教師、カステールであつた。

――これからは、西洋の學問にも通じなくてはならぬ――

長正は、當時の國家の狀態を見るには、なか〳〵明敏であつた。

さうした長正の心境がぐん〳〵、外人教師カステールの氣持をひきつけていつたものらしい。

それを知ると、また小笠原藩の少年達のねたみはましていつた。

母の愛

一

「長正、伯母さまから小包が屆いたぞ」

巖之助がいま、飛脚から受取つたばかりの小包を持つて部屋に入つて來た。

明治も三年になると飛脚の便もよくなつて、四百里も離れた會津と、小倉の間でも、一ケ月そこ〳〵で音信が通じるやうになつてゐた。

明治以前は通し飛脚といつて、會津から九州まで何十日かゝつてもづつと通して歩いたものであるが、その頃は今の郵便の前身で、宿場宿場で交換して便利をはかることになつてゐた、宿場に一定した宿屋がそのつとめをしてくれて、つまり今の郵便局の役目を引受けてくれたわけであつた。

だから、以前よりは、づつと便利に飛脚便がとゞくことになつてゐた。

「何、母上から」

フランス語の教科書から眼を離した長正は、巖之助の手元を、なつかし氣にかへり見ながら、長正は

「何であらうか」

と、小包を視つめてゐた。

「早く開けて見ろ」

「どれ」

長正は巖之助の手から小包を受取ると、幾度もうちかへしうちかへし上書きをながめた。

小包は油紙の上から麻糸をかけて幾重にもたんねんにしばつてあつた。

油紙も、麻糸も、それ〴〵會津特有のものであつた。
うちかへしうちかへし眺めてゐると、もうそれだけで、何だか母に會つたやうになつかしい氣がした。
「お前はいゝなあ、伯母さまがゐるから」
長正が、なつかしさうに小包をながめてゐると、巖之助はしみ〴〵とさういつた。
巖之助には母がなかつた。家老神保内藏助の長男も、いまでは、たつた一人の伯母である、長正の母をなつかしむやうになつてゐた。
「うむ、おれは倖せだよ」
長正は、小包の結び目の一つ一つをほどきながら、母が、手にさはつた糸だと思ふと、決して粗末には扱ひないと思つて、ていねいに、はさみもつかはずに手

でほどいた。
「おゝ着物だ」
中から出て來たのは、正しく仕立おろしの木綿の袷だつた。
なつかしい紺の香が、ぷんと鼻をついた。
長正は、思はずその袷をおしいただいて、そのまゝそれに顔を埋めるやうにして匂ひをかいだ。
母、母、母、
母なればこそ、さう思ふと思はず涙が出さうになつた。だが、いくら從兄でも、他人のゐる前で、涙を見せるなどは會津武士の出來ないことであつた。
じつと我慢して、袷を顔から離すと、
「長正、おれにも匂ひをかがせてくれ」

巖之助は、長正の手から袷を受とると鼻の先へ持つて來た。

「これは、まさしく故郷の匂ひだ、これには、どこもかしこも伯母さまの手がふれてあるのだ、この襟にも、この裾にも、あゝさういへば故郷ではもう袷がいる頃になつたのだなあ、今日は八月の十五日だ」

その頃は、舊暦だつたから、八月の十五日はいまの九月の十五日過ぎに相當する、さうすれば、もはや、故郷の會津では、朝晩は袷が必要のころだつた。

南國にゐると、まだ殘暑が嚴しくて、單衣を着てゐても、汗が滲み出るやうだが、四百里離れては、暑さ寒さも、そのやうに違うものであらうか、

二人は一枚の袷からいろ〳〵のことを思ひめぐらしてゐた。

喜多方在の緣戚に身を寄せてゐる母は、毎晩夜の更けるまでこの袷を縫つてくれただらう。今頃になると、いろんな虫が鳴いてゐたなあ、母はいま頃、何をし

てゐるだらうか——

戰爭に荒された家の中で、或ひは糸繰車でもまはしてゐるではあるまいか——

世が世であれば國老萱野權兵衛の奥方も、世がかはれば一日の徒食も許されない境遇におかれてゐる。

——よし、おれはあくまでやりぬくぞ——

長正が、かうこゝろに誓つた時、

「長正、石にかぢりついても、小笠原の連中に負けてはならないぞ」

巖之助も、同じ思ひだつたらう。かういつて眼をしばたいた。

「うゝ」

長正は、ごくんとうなづいて疊の一點を視つめてゐた、何かものをいへば、いまにも涙があふれてくるやうな氣がしてならなかつたのだつた。

一

その夜、長正は、ランプの灯の下で母へお禮の手紙を書いた。

母上さま、

お送り下さいました袷は、本日有難く受取りました。

私は、熱心に勉強してゐます。決して小笠原家の人達に負けてはならないと思ひます。

劍道もこち等へ來てからぐんと腕が上りました。

父上に見てもらつたら、あるひは、まだ、問題にされないかも知れませんが、いまのところ、この育德館では一二とさがらない自信をもつてゐます。

袷をいたゞいて氣がついて見ますと、もう秋ですね、會津よりはづつと暖かい、豐前の國は、まだ嚴しい殘暑に見舞はれてゐますが、朝夕はさすがに涼しくなりました。

會津は相當寒くなりましたことゝ思ひます。これから寒くなると氣をつけてお働き下さい、私が、成人するまでは、どんなことがあつても、體に氣をつけてゐて下さい。

小笠原藩は、文武の譽高い名譽の家です。いろ〳〵と有難い修業が出來ます。

はる〴〵四百里の海山を越えて來た私達にとつて、ほんたうにいゝ修業が出來ると思ひます。

こゝまで書いて、長正は、ふと、意地の悪い小笠原家の少年達のことを頭に浮べたのだつた、しかし、そんなことを書いて母に心配かけて何にならうかと思ふと、とてもそんなことは書けなかつた。嚴しい母のことだ、どんなお叱りを受けないものでもないと思ふと、立派に修業を仕通すといふ決意だけを書いた。

母上さま、

故郷の秋のことを思ふと、一番先に眼に浮んで來るのは、あの身不知柿です、今年は、柿は豐作ですか、

四百里も離れてゐると、氣候も、風物も違ひます、こち等には、會津のやうにうまい柿は一つもありません。

毎年秋になると、枝もたわゝに成りきがる名物の身不知柿、長正は、さう思つただけで胸のうちが、わく〳〵するやうなゝつかしさを感じた。

あゝ會津の秋はなつかしいなあ——

長正は、故郷の秋の魅惑にしばし筆持つ手を休めて瞑想にふけつた。

母上さま、

いまでは、何不自由も感じません。會津の名、父上の名を汚さぬやうに、一心に勉強します。母上も、どうぞ、御息災でお過し下さいませ。

八月十五日

長正より

母上さま

長正は、もう一度讀みかへて、それをくるくると卷いて封筒にをさめた。

この手紙がついたら、母はどんな顔をして喜ぶだらうか——

長正は、母の喜ぶ顔を瞳に畫いて見た。

久し振りで、何となく心がかるくなつた。

三

長正が、母に手紙を送つてから約四十日、長正は意外なものを見た思ひだつた。

あはたゞしくかけ込んだ早飛脚の手から、一通の書狀を受取ると、それはまぎれもなく母からであつた。

取る手もおそし、

胸に何かどきんとするものを感じながら封を切つて見ると、そこには、

お手紙、拜見しました。この手紙は、別に早飛脚を仕立てるほどのものではないかも知れません。しかし、母ももう寄る年なみです。やはり氣にかゝるのは、四百里も離れてゐるそなたのことです。

私は、袷を送りましたのも、手紙を出しますのも、決してお禮ほしさにでもありませぬ、それは、人の親として爲さねばならぬことをしたまでです。

ですから、母は、そなたの手紙の中から、母さま有難うと、お禮の言葉が一

つも見つけることが出來なくとも不足はいひませぬ。
でも、母は、そなたの手紙から絶對見つけたくないことを見つけました。
長正、そなたは、何といふめゝしい人になりました。
切角、お殿様のお蔭で、勉學にやつていたゞいてをりながら、食物のことを
いふとは何事です。
會津の柿が、うまからうが、うまくなからうが、小倉の柿が、どうであらう
が、それは、そなたの勉學にとつて、どれほど大切なことなのです。
母は、そなたから、そのやうな食べもののことを伺ひたくはありませんでし
た。そなたが、學問をなさるのに、どれだけ苦勞をしたとか、どれだけの不
自由をしたとか、さういふことでありましたら、私はどんなにもして、はげ
ましの言葉も送れます。

しかし、事食物については、私は何といふことが出來ませう。
恐れ多いことながらそなたの勉學の費用は、大殿容保公からいたゞいてゐる
のですよ。
それが何ぞや、食べものゝことに氣をとられるやうな手紙の書き方は、
簡單なあれだけの手紙にさへ、あのやうなことを書くそなたは、日常どんな
ことを考へてをられるか、母は情なくなりました。そなたは幼少の時から、
立派な會津の、お話と遊びの什や、童子訓をよく知つてゐるはずではありま
せぬか。
これから、心を入れかへて、あのやうなことのないやうにしなければ、もう
親でもない、子でもありませぬ、くれ〴〵も母の心をお察しの上、殿の名を
父の名をはづかしめないやうにたのみます。

長正殿

この手紙を見て、長正はがくぜんとした。身不知柿のことは、決してほんたうに食べたいからいつたのではなかつた。

小倉の柿が拙いから、さういつてやつたわけでもなかつた。

いはゞ文章を書く時の一つの添えものに過ぎなかつた。

あの身不知柿のことを書くと、長正には故郷のことが、いかにもぴつたりと思ひ出されるのだつた。

しかし、母のいつた、六七歳から、必ず守らされてゐた、會津の「お話と遊びの什」の中には、ちやんと、

一、戸外で食べものを食べてはなりませぬ、といふ一條があつた。

それを思ふと、母の案ずるのは少しの無理もなかつた。七つ八つの子供でさへさうであるのに、十六歳の長正が、何とて手紙にかくも女々しいことを書いたのであらうか。

母として見れば、殿に申し譯もないであらう。

父にも申し譯がないであらう。

そして世間に顔向けも出來ないであらう。

それにも増して辛いことは、かうした長正の考へ方をそのまゝ放任しておいたなら、將來長正が果してどんな人間になるであらうか。

長正にはその母の氣持がひし〳〵と骨身にこたへた。

——母上申し譯ありませぬ——心に詫びながら、その手紙をくる〳〵と卷くと

またもとの狀袋へをさめた。

——以後は、必ず神明に誓つて違背仕りませぬ——

幾度も心の中でくりかへして、こみ上げてくる熱いものをじつと奥歯でかみ殺した。

「どうした長正、何の手紙だ」

左内や、木村、などの連中が、長正の沈んだ顔を見て心配さうにたづねた。

「いや何でもない」

長正は、いそいで、その手紙を懷ろへしまひ込んだ。

——何時でもこゝろのひもが、ゆるんで來たら、これを出して、しめなほすのだ——

長正はそのつもりで、懷の奥深くへその手紙をしまひこんだのだつた。

運命の袷

一

「長正」

巖之助が、入つて來た。

いつものやうに親しみのある聲ではなかつた。

「……」

長正は「なんだ」といつて振かへらうとしたが、その聲が異樣の響きをもつて胸底に喰ひこんで來たので聲が出なかつた。

無言で振かへると、

「困つたことが出來たのだ、階下へ行つて見ろ」

「なんだ」

始めて長正は「なんだ」といつて、起ち上つた。

たゞならぬ巖之助の氣配を感じた。

「お前の手紙を拾はれたのだ」

「いえつ」

長正は急いで內懷ろへ手をやつて見たが無い、明かに落してゐた。

「どこだ」

かつて一度もものに驚いたことのない長正の顏は見る〳〵蒼白くなつていつた。

「どこだ、案內してくれ」

「ついて來い」

巖之助が先に立つて、長い廊下を寮の入口の方へ急いだ。
二人は無言のまゝぢつと唇をかみしめて歩いた。
「どこへ行く」
「どうしたのだ」
途中で、左内と、新治にと會つた。
「……」
「……」
二人ともそれには答へなかつた。
入口の掲示場の下に、小笠原藩の少年達が七八人集つてゐるのがすぐ長正の眼
についた。
「何といふ奴等だ」

「あきれかへつてものがいへぬ」
「第一食客のくせに、食物のことをいふなどとは飛んでもない奴だ」
「現在、眞實の母さへ驚くほどの手紙をやつたのだ、大變なものだらう、育德館の面汚しだ」
「だが見ろ、平常のあの高慢ちきな顏を」
さういつて、惡罵してるのは、いつぞや、寮の樹立ちの中で、長正のために、
「卑怯なことはせぬ」
と、はつきり言質を取られた、近藤と、今日も試合の折、長正の諸手突を喰つて、仰向にひつくりかへつた、腕自慢の佐久間大助であつた。
「鐵拳制裁を見舞つてやれ」
「いやあんなものは放逐しろ」

「賛成、賛成」

さういつて、がや〳〵と騒いでゐる上を見上げれば、その掲示板には、長正が母から送られた手紙を、三つにちぎつて、三段にはつて、その脇には、

（耻知らず）

（賢母豚兒）

（會津の死におくれ）

（死におくれ正體見たり食べる意地）

これはまた、墨痕鮮かとはいへないが筆太の字が、これ見よがしに嘲笑を浮べて書き連ねてあつた。

「來たぞ」

「おゝ死におくれが來た」

長正、嚴之助、左内、新治の四少年を見つけると、小笠原藩の少年は、左右に道をひらいて、嘲笑ひながら長正がどうするかと、しばらく見まもつてゐた。

誰がいひ出したか、小笠原藩と、會津藩の對抗試合の話が事實となつて、あと二日、九月二十二日に迫る小笠原神社の奉納試合となつてあらはれることになつた。——困つたことだ、また恨みが殘る——長正は、これまでの兩藩の睨み合ひを思ふにつけても、さう思はざるを得なかつた。

この試合にしても、あるひは小笠原の方から事をかまへて、會津藩を叩きつけようといふ魂膽かも知れないと、長正はさうも考へてゐた。

といふのは、會津から八人全部、小笠原から八人の、對抗であつたがこれでは、まつたくの片手落ちだ。

會津の少年達は、何もこゝへ武術の稽古に來たのではない、學問は出來ても武

術の出來ない人もある、幸ひ、會津は文武二道に秀でた武士を作るために、二百有餘年の傳統がある。この八人の中には、からきし下手くそといふものはゐなかつたが、長正、巖之助、木村新治、五十嵐左内を除けば、他は優秀な劍士とはいへなかつた。

反對に、小笠原藩の方では、何十人のうちから、撰りすぐつた八人である。會津藩が分の惡いのは火を見るよりも明かであつた。

だが、いまとなつては退く術もない、長正は必勝を期して稽古をはげんだ、その結果がかうして、大事な大事な母の手紙が内懐から落ちたのにも氣がつかなかつたのであつた。

長正は落書の前に釘づけにされたやうに立ちつくした。

巖之助も、左内も新治も、

二

長正の胸には複雜ないろ〳〵のことが思ひ浮んだ。

父の顔、母の顔、嚴しい會津の童子訓、遊びとお話の什、人もあらうに、近藤や、佐久間の手にこの手紙が落ちやうとは、

この母の手紙を見たもののうちで、誰か果して、長正の潔白を、證明してくれるものがあらうか——

從兄の巖之助さへ、怒りにふるへる眼ざしで、自分を睨みつけてゐるではないか？

さすがの長正も、瞬間、眼前が暗くなるのを覺えた。

「長正」

「……」

「どうしてこんなものを落したのだ」

巖之助はさすがに、

「どうしてそんなばかな手紙を母に送つたのか」

とはいへなかつた。

思へばあの袷一枚、あゝ見れば、長正はいまその仕立おろしの袷を着てゐるではないか、

小包がとゞいた日は、二人でなつかしい故郷の匂ひをかぎ合つた袷だつた。

自分でも故郷がなつかしかつたから、長正もどんなになつかしかつただらうか。さうした氣持があるひは、嚴しい伯母のこゝろにふれるやうなことを書いて

やつたのかも知れない——さう思ふと、少しづゝ長正の氣持がわかるやうな氣がした。

それにしても、どうしてこんな意地悪共の眼の前にさらしものにされるやうなことをしたのであらうか——

それのみか、いつもはていねいにたゝんで仕舞つてあつたこの袷を、昨日、着替へをよごしたので、ほんに今日一日だけ出して着たのに、その袷を着て、こんな耻をかゝされようとは——

長正も巖之助も、泣くにも泣けない、口惜しさだつた。

「おい、どうした」

二人が無言で沈痛に立つてゐると、これはいつぞやの近藤であつた。

「小笠原家には、人の弱味につけ込んだり、舌の二枚ある片輪者は一人もをらん

ぞ」

「……」

長正は近藤の方を見向きもしないで一歩掲示板の方へ進み出た。

理由は何であらうと、どんなことをされようとも、この手紙だけは立派にまもらなければならない、母の手紙がさらしものになるといふことは何といふ恐ろしいことだらう——

「學問他なし忠と孝」

——あゝおれは、不幸者になりたくないぞ——

血を吐く思ひで、二歩、三歩と前へ進み出た時、

「三べん廻つてワンといつたか」

なるほど、手紙の下に小さく、

「これがほしくば、三べんまはつてワンといへ」

と書いてあつた。

「わつははは」

「わつははは」

とたんに爆發するやうな笑聲が起つた。

「これ默れ、默らんか」

見兼ねて、木村新治が一歩踏み出した。

「どうする、拔く氣か」

佐久間が、一歩退りながら憎々し氣にいふ、

「斬る、會津武士をはづかしめるやうなことを申せば、いかにも斬るぞ」

新治は大刀の柄に手をかけた、父の一刀流を受けて、長正と並ぶ名手だつた。

長正はそのまに素早く、手紙をはがして懐ろにをさめると、なにか決するところがあるやうに、

「木村、待つてくれ」

「止めるな、やつつけるのだ」

「いや、おれが悪かつた、許してくれ」

この場の様子が、急にかはつたので、小笠原の少年達も、氣味悪さうにおしだまつてしまつた。

「みんな、おれの部屋へ來てくれ、殘りの四人も集めてくれ、賴む」

長正は、さういふと、いま來た廊下を引きかへした。

人々はその後に從つた。

三

「申し譯がない、まつたくみんなに申しわけがないお詫びは後でするから、許してくれ」

長正は、もはや悪びれてはゐなかつた。

しかし、さん〳〵として體全體から、ほとばしる悔悟の色は、誰の目にもはつきりと見てとられた。

すぐには誰も聲を發するものもなかつた。

「長正、お前はいま、お詫びは後でするといつたが一體、どうして詫びるつもりだ」

巖之助は、年長者であり、從弟であるところから、出來れば、その責任の半分は負はなければならないと考へたのだつた。

一通り事情を知らない四人に事情を説明してから長正の方へ向き直つた。

「それは」

長正は、それまでいつて、いひ憎さうに口をつくんだ。

「どうした」

巖之助がたゝみかけた。

「神保まで」

さういつて、一ひざにぢり寄つたのは、さつき、刀の柄へ手をかけて、小笠原の少年達をちゞみ上らせた木村新治だつた。

「おれは、事情は知らぬ、知らぬが、大體の見當はつく　長正君が食物のことを

いつてやつたといふが、どの程度かわからぬ、しかしおれは信じてゐる。飯のおかずが悪いから、味噌づけを送つてくれだの鹽魚を届けてくれだのといつてやつたのではないと思ふ。おれ達だつて感じてゐることは、こゝの食物と會津の食物とは味が違ふ、實際まづいものだつてあるぞ、だが、武士は決してそれをとや角いふものではない。また若し、いつたとしてもだ、母があれだけ訓戒をしてるものを、小笠原の連中があんな悪どい嘲罵を浴びせる必要はないではないか」

「さうだ、郡には同情すべき點があるよ」

誰かがさういつた。

しかし、かうした新治の同情も、ほんたうはあたつてゐなかつた。

食物が、うまいもまづいも、ほんたうは一言もふれてはゐなかつた。まづいといつたのは、人間の主食物でもなんでもない、柿のことだつた。それも、會津の

柿を食ひたいなどとは一言もいつてゐないのだ。
長正は、せめてその眞相だけを、こんなに自分を辯護してくれる友人達に知らしてやりたいとも思つた。
だが、今更それをしたら、辯解になる、さうする氣持が、なんだかあさましく見えた。
「ならぬことはならぬ」
もう、滿座の中で、會津武士を引合ひに出されて面罵されたのだ。そのもとを作つたのはみんな自分だ——
長正は、もはや辯解の要を認めなかつた。
——母にも濟まぬ、父にも濟まぬ、それよりも、もつと濟まないのは、謹愼中の大殿容保公である——

「みんな許してくれ。お詫びは、二日たつたら必ずする。二日だけ待つてもらひたい」
決意は出來たのだつた。
きつぱりとさういふと、長正は幾分明るくなつた顏をあげた。
「二日たてば」
巖之助が口の中でつぶやいた。
その日こそ、小笠原神社の祭禮當日ではないか。
「さうか、それならば、こちらから賴む」
腕に覺えの、會津武士でも、劍を持つたら、長正の右へ出るものはなかつた。
この雪辱のために、長正が起ち上つて、精かぎり根かぎり彼等を相手に鬪ふ決心をしてくれたのだと思つたのは、

「こちらから頼む」
と、いつて胸を撫でおろした左内だけではなかつた。
七人が、七人とも同じ思ひだつた。
「さうだ、ほんたうにたのむよ、彼等の意地悪は一さいにとどまらん。こんな時こそ、叩いて叩いて叩きまくつてやらねばならん。これこそ天の與へた絶好の機會だ、郡、頼んだぞ」
木村新治は長正の手をとらんばかりにして喜んだ。
「では、みんな許してくれるか、おれは、制裁を加へたいけれどそれは出來ん、長正しつかりやつてくれよ」
巖之助は、長正とみんなを等分に見ながら、ほつとしたやうにいつて頭をさげた。

「なにも、おれ達の間で、許すも許さんもないではないか、八人のうち誰が恥辱をうけても同様ではないか、今更許すも許さんも」
はり手紙の場には居合はせなかつたけれど、熱血漢で通つてゐる、佐瀬豊太郎が熱した口調でかういつた。
「有難う、おれはきつとみんなの期待に背かんつもりだ、頼む二日だけ待つてもらひたい」
「君が、そのつもりなら、二日どころか二月でも二年でも待つてやるよ」
五十嵐左内がさういつて始めて口もとに笑ひを浮べた。
その笑ひのために、その場の空氣が急にやはらいで來た。
「たのむ」
長正の顔も、また明るくなつた。

四

その夜、巖之助と枕をならべて寢た長正は、なか〳〵落ついてねつかれなかつた。

寢る時、いままで着てゐた、袷は、ていねいにたゝんでしまつた。

――今度これを着る時は、卑劣な小笠原藩の連中を、片つぱしからなぎ倒す時だ――そしてその次は――さう思ふと、さすがに長正は胸の中に熱湯のやうなものかけめぐるのを感じた。

じつと眼をつむると、四百里離れた故郷の景色が、すぐそこのやうに浮び上つて來た。

鶴ヶ城の天守が、毅然としてそびえ、庭の植込の中には、二百五十年も樹齡を經たといふ身不知柿が一本殘つてゐた。

その身不知柿は初代の權兵衞が植ゑたのだといふ話と、いやその前からあつたのだといふ、二つのいひつたくが殘つてゐた。

初代の權兵衞といふと、藩祖正之公の時代からだから、二百三四十年も前からである。その枝には、毎年すゞなりに實が、結んだ。

みづ〴〵しい、見たゞけでもうまさうな柿だつた。

小倉の柿のやうに小粒でもなかつたし、色も惡くなかつた。

うまさうな、まつたくうまさうな柿だつた。

あの身不知柿を形容するのに、うまさうなといふ以外に、なにか一體適當な言葉があるであらうか？

長正にはそんなふうに思はれた。しかし、いまとなつては、いかに辯解しようとも、全部無駄であつた。たゞ自分では決して、會津武士の名を、父の名を傷つけるやうなことではなかつたと信じることが出來た。

だが、母をあのやうに案じさせたことは、これは、決して許されないことだ、母には辯解無用、二度とふたゝびこのやうな心配をかけないやうに、さういふつもりで內懷へしまひこんでゐた手紙が小笠原藩の連中に拾はれて、あれだけの侮辱を受けた。これもいまとなつては辯解無用である。いかに辯解しようとも頑迷な彼等に解つてもらへやうはずはなかつた。それにつけても、七人の友人達の友情は、だが、その友情にも甘へてはならぬのだ——

「ならぬことはなりませぬ」

忘れ得ぬその玉條の言々句々、

巖之助は、さつきからかすかな寢息をたてゝ眠つてゐた。

隣室からもかすかな寢息が聞えてゐた。

野外の虫の聲が雨の降るやうに、幾つもの音と音とが、溶け合つて、一つの音を生んでゐるのが、ざあつと雨の降るやうに聞える。

秋だといふことは、この虫の音一つでもよくわかつた。

すべては、二日の後のことだ——

長正は、靜かに眼をとじた。

今度は、かすかに快よいねむけが、もよほして來た。

會津武士道

一

九月二十二日、朝からよく晴れて、空に浮んだ眞白な流れ雲さへ數へるほどしか見えなかつた。

昔なつかしい、子供達の鳴らす、笛や太鼓の音が夜の明けきらないうちから、街はずれの育德館の寮まで聞えて來た。

「長正」

呼ばれて眼を開けて見ると、枕もとに、ちやんと着物を着た巖之助が立つてゐた。

「今日は、大切な試合の日だぞ」

「さうだ、いま起きる」

長正は、ぐつすり眠つたあとのはれ〴〵しい氣持で床の中で思ひきりのびをした。

「あゝゝゝ」

あくびが一緒に出た。

まつたくふだんと少しも變らない氣持だつた。

「おい、大丈夫か、のんきさうにあくびなどしてゐて」

「大丈夫だ、安心してくれ」

長正は聲とともにがばつと飛び起きた。

顏を洗つて、二日前にしまひ込んだ袷を風呂敷の中から出すときは、さすがに氣が引きしまつた。

「お早う」
「お早う」
みんな心配してのぞきに來た。
長正が元氣に、身仕度をしてゐるのを見ると、みんな安心したやうに、
「たのむぞ」
「今日こそしつかり」
「雪辱の日は朝から晴天、幸先きが、いゝぞ」
などと互ひにはげまし合つた。
朝の食事は、かんたんではあるが、祭禮を祝ふ赤飯が出された。
祭禮といふと故郷が思ひ出された。
會津といふ國は敬神の風の厚い國であつた。

加藤家の後を受けて入國した、容保公の先祖保科正之は、會津の神道を切り開いたほどの大義明分の名君であつた。
容保公は、正之公の再來であると噂された人であつた。
年毎に秋の祭りは近隣農村の豐年祭りとともに盛んになつていつた。
藩校日新館でも毎年秋の祭禮には武道の試合を催した。
その度に年少の長正はよく優賞したものだつた。
そのことはこの八人が八人誰も知つてゐた。しかも長正はいままで一度も「是が非でも勝たねばならない」と思つて試合に望んだことは一度もなかつた。
「劍技を弄ぶのではない、武の道を修めるのだ」
父からもさう敎へられた。日新館でもさう敎へられた。
彼は決して勝敗を眼中においたことはなかつた。

だが今度は違ふ、

是が非でも彼の高慢鼻を叩き折らなければならないのだ。

今度の試合は決して單なる武術の試合でも武道の試合でもなかつた。

小笠原藩對會津藩の名譽をかけての試合であつた。

小笠原藩としては別に他意あつてのことではなく、武道奬勵の意味から輕く扱つたのであるかも知れないが、すくなくとも育德館の生徒はさうでなかつたことは明かである。

――よし勝たう、勝つた上で自分は自分のとるべき道をとるばかりだ――

長正は幾度心の中でくりかへしたことだらう。しかし一度覺悟を決めたこゝろはかへつて春風のやうに爽やかだつた。

今朝も巖之助に起されるほどよく眠つた。

小笠原藩の連中もこゝ一日は何を感じたのか惡口をいふものもなかつた。さうした表面の平和がなにか餘計無氣味なものをはらんでゐた。

「さあ出かけよう」

「今日こそ雪辱だ」

元氣一ぱい堂々と小笠原神社の境内へ駒をすゝめた會津八少年の眉宇には、決死の色がほの見えた。

一一

近郷の老若男女は申すに及ばず、中津藩や秋月藩からも若侍が見物に來た。

會津藩對小笠原藩の試合は、よほどの興味をひいたものらしかつた。

番數がすゝめられていよ〳〵、兩軍の對戰となつた
萬雷のやうな拍手に迎へられて、呼び出されたのは
會津藩、齋藤德治、小笠原藩、吉盛小次郎の二人であつた。
「勝負一本」
審判の手が動くと、二人は、ぱつと起ち上つた。
「えいつ」
「やあつ」
齋藤德治は長正や左内に比べて數段の見劣りがした。
しかも小笠原藩からは、撰りぬき八人のうちの一人だ、鬪ひは最初から苦戰に決つてゐた。
だが、その苦戰こそ、全國二十有餘年の軍勢を向ふにまはして戰つた、會津戰

爭當時の苦戰を思ひ出させた。
擊ちてし止まむ、
その氣構へだけが、齋藤德治の竹刀に熱を持たせた。
「吉盛」
「吉盛」
聲援は、小笠原藩の一方的聲援で、會津藩からは寂として聲もなかつた。
「彼が、擊たるればおれが」
と、いふ決意だけが、後の七少年の眼に見えざる陽炎となつて燃えさかつてゐた。
「えいつ」
吉盛が、一歩踏みこめば、齋藤は一歩さがつた。

「いえつ」

一聲叫んだ吉盛が、眞向みぢんと打下した竹刀を、瞬間どうしてはずしたのか齋藤德治は夢中でぱつと引つぱずした。

「小手」

流れる相手の小手へ、立派に決つて一本

「小手あり」

審判の聲が、さはやかに響いた。

齋藤は勝つたのだつた。

拍手がなつた。

それは會津藩からでも小笠原藩からでもなく、中津藩や、秋月藩から見物に來た人々の間からであつた。

幸先よし——

齋藤は、ほつとして、二人目の敵に相對した。

しかし今度はものゝ見事に面をとられて引き退つた。

二番三番、と番數が進んだがもとより會津藩に分のあらうはずはなかつた。敵の五將まで斬り崩した時、味方は、副將の神保巖之助が呼び出された。

健闘善戰。

巖之助はからうじて敵の五將、佐久間宏を打ち破つたが、次に現れた四將の、佐々木三平のためにもろくも打ち破られて無念のほぞをかんだ。

會津藩は、殘るもの主將の長正只一人。

小笠原藩は、四將の佐々木三平を送り出し、まだ餘裕綽々、こゝに彼等の狗肉の策があつたのだ。

巖之助が、他愛もなく敗北を喫した、佐々木三平は、どうしても副將格の少年であつた。それを四將に出して、あはよくば四將をもつて、會津藩全部を叩きつぶし、二度と口の利けないやうにしようとするのが彼等の腹であつた。計略圖に當つて、今や、小笠原の四將と、會津の主將の對戰となつた。

三

「長正」

「たのむぞ」

會津藩の七少年は血を吐く思ひで叫んだ。

「佐々木」

「撫で斬りにしてしまへ」

「食ひ意地侍」

「死におくれ」

かうした罵聲をきゝながら長正は、悠々と神前に一禮した。

そして、父の靈にも、鄕土の先輩白虎隊の靈にも、

「勝負一本」

審判の手が引かれると、二劍士は互に別れて相青眼に構へた。

「えいつ」

「……」

長正は、無言で、相手の氣合を受け流してしまつた。

「えいつ」

「……」

再び無言、

佐々木は十八歳、身長五尺五寸、大人も及ばない堂々たる體軀、長正は十六歳五尺一寸、年齢からいつても體力からいつても甚だしい差がある。

「えいつ」

三度、さそひの氣合をかけられて、長正ははじめて應じた。

やゝあつて長正の劍尖が、かすかに、ふるへるかに見えた瞬間、

「お面」

と眞向から斬りこんだ、しかし、敵も去る者、

「おう」

と、受けた。

受けられた長正の竹刀と、受けた佐々木の竹刀は、鍔ぜり合ひとなつてからみ合つた。

「あゝ」

「もう駄目だ」

知らない人は誰でもさう思つた。

鍔ぜり合ひは、體力と體力の決戰である。體力からいふと長正の方には、全く勝味がなかつた。

「佐々木、おしまくれ」

誰かが聲をかける。

一見、この勝負は佐々木が、兩手にぐつと力をこめて押しまくつたら長正が、他愛もなくふつ飛んでしまひさうに見えるのだつた。

だが、形勢は、瞬間にして逆轉した。

「胴あり」

審判の手は長正にあがつた。

互ひに、ぱつと離れて構ひをなほす瞬間、長正、得意の拔き胴が、もの〻見事に決つたのだつた。

郡の拔胴は、充分佐々木も警戒したはずだつたが、巖之助を他愛なく負かしたので、その餘勢をかつて、一氣にと思つた油斷が、竹刀を合して數分、今度は他愛もなく勝ちを制された。

それを見た會津藩の少年達は、我れを忘れて手を叩いた。

四將倒れてから、三將、副將と全く他愛もなく敗れてしまつた。

そのことごとくが、拔胴でやられてゐた。

小笠原藩、水島小六郎、

主將と主將の對戰である。

しかし敵の三人を破つた長正は、既に疲れてゐる。この新年にいかなる秘術をもつて當るか。

いまや興味は高潮に達した。

水島が、正面へ出るまで、長正は眼をつむつて呼吸を整へてゐた。

——この一戰、どうしても勝たねばならぬ、これに負けたら、今度こそは會津藩の名譽がまるつぶれだ——

「いざ」

と、禮をかはして兩雄は互に別れて、また、青眼にかまへた。

いまや、滿場寂として聲なく、長正の劍尖からほとばしる、異樣な殺氣にのま

れて、さすがの敵の主將も、たぢ〳〵の形だつた。

「えいつ」

「おう」

水島も、前の二人が、他愛もなくやられるのを見て、愼重に愼重を期した。

互ひに睨み合ふこと數分、何時の間にか、二つの肩は、荒い息づかひのために搖れはじめた。

水島の額には、油汗が浮んで來た。

それでも、二人の竹刀は動かなかつた。

「えいつ」

「おゝ」

長正が、一歩出れば水島が一歩退る、水島が一歩踏み出せば、長正が一歩退

る、正に龍虎の爭もかくやと見た瞬間

「えい」

水島の竹刀が、一文字に横に流れた。

相手は機先を制して、胴をねらつたのだつた。

眞向お面と振りおろして、その竹刀を受けとめられたら最後、鍔ぜり合となつて、また前の三人のやうに、拔き胴をとられることは火を見るよりも明かといはねならない。

水島はそれを警戒したのだ。

「おゝ」

長正は、僅かに身を開いてそれをかはすと、

「えいつ」

一歩踏み込んで、面をのぞんで斬りおろした。
「おゝ」
進むも退くもかうなれば相手は受けるばかりだ、
がつ、
水島は、まんまと長正の術中に陷り、我れから、長正の鍔ぜり合ひにのぞんで
しまつた。
「萬事休す」
かうなると敵は焦る一方である。
「えいつ」
はげしくもみ合つたまゝ互ひにばつと離れたと思ふと、
「胴あり」

またしても拔胴である。
敵も味方も我れを忘れた。
「勝つた勝つた」
「これで、これで雪辱がなつたぞ」
「長正有難う」
「郡」
いくら、他人の前で涙を見せることは愼みが足りないのだ、と敎へられても、
今度ばかりは、どうにもならなかつた。
會津の少年達は、長正が、自席へかへるのを迎へて、聲をあげて泣いた。
「これもみんな、白虎隊の靈が、おれをまもつてくれたのだ」
さういつて長正も泣いてゐた。

四

それから數刻、

長正は、みんなに向つて、武道場へ集つてくれるやうにと賴んだ、

人々は怪しみながらも彼の前に並んだ。

「諸君、有難う、おれもこれで汚名の何分の一かを消すことが出來た、これもみんな諸君の友情の賜だ、こゝろから禮をいはしてもらう」

長正は、きつとして一同を見まはした、こゝろなしか、その顏は、蒼白だつた。

「長正、改まつてまた、どうしたのだ」

と、たづねて見たいこゝろもあつたが、長正の態度があまり嚴肅なので、一同は默つてゐた。

「しかし、おれはこれだけの汚名を流した以上、この上ともに諸君の友情に甘へることは出來ない。子供の時から、敎へられ、まもらされて來た、「ならぬこと」を、おれはしたのだ、おれは今後の努力を諸君に願つて、潔よい道を選ぶつもりだ。くりかへしていふが、有難う、諸君の友情に對しては、何と報ひていゝか解らぬ、巖之助、おれは、諸君の友情に感謝しながら、笑つて死んで行つたと母に傳へてくれ」

「長正」

その時、たまりかねて長正に飛びついたのは五十嵐左內だつた。

「なにをばかなことをいふ、みんなこんなに君に對して感謝してるではないか、

どうして死なねばならぬことがあるものか。悪いのは小笠原の奴等だ」
「いや」
長正は、静かに頭を振つた。
「事の善悪を今更たゞしたところで、どうならう。會津の先輩は、眞の理非をたゞさずに死んでいつた。おれも、おれも會津の武士だ、默つて死なしてくれ」
長正は、さういふと、左内の手を左内の膝にかへしながら、
「嚴之助、介錯をたのむ」
いつたかと思ふと、腰の大刀をぬき放ち刀身を、袖にからむと、ぐつと右の脇腹にさし通した。
「長正」
「長正」

「郡」
もはや止める人はなかつた。
「今日は、九月の二十二日だなあ」
長正は苦しい息の下から顔をあげると、一同を見まはした。
何といふ奇しき因縁であらう。
九月二十二日は會津開城の當日ではなかつたか、
その日、
「善悪をたゞしてどうならう」
と、いつて、我れと我が腹に刄をあてた郡長正は、當年十六歳、飯盛山に自刄した白虎隊の最年少者と同じ年齢になつてゐた。
「おゝ」

「郡君」

その時ばた〳〵とかけこんで來たのは、小笠原藩の少年達であつた。

近藤もゐた。

佐久間もゐた。

數刻前長正の竹刀に打ちふせられた主將の佐々木もゐた。

「郡君、許してくれ、おい達が惡かつた」

「度を過ぎた惡戯を許してくれ」

「諸君、これからは仲よくしてくれ、おれは、おれはいゝ、おれは會津に生れたために死んで行くのだ。諸君の面あてではない、會津の、會津の地に生れたためだ」

長正の息はだん〳〵苦しくなつていつた。

瞬間、母の顏が、次第に視力のにぶつて行く長正の瞳の奥に浮んで消えた。

續いて父の顏が、そして白虎隊の自刄した悲壯な姿が——

長正は、きりきりと、一文字に刀をひきまはした。

「巖之助介錯を」

もう息が火のやうに熱かつた。

「長正許せ」

巖之助はきつとして長正の後へ廻つた。

紫電一閃、長正の首は前へ飛んだ。

長正の體は、ばつたりと前へのめつた。

斬口からは、こん〳〵として血汐が流れた。

「長正」

「郡」

「ああ」

「おゝ」

一座の少年達は聲をあげて泣いた。

巖之助は、涙を拂つて、長正の袷の片袖を切つて、首を包んだ。

「思へば、この袷が」

巖之助は、また新な涙がさん〳〵と頰をつたつて流れるのを知つた。

長正は、死んだ。會津武士道のために、

父子二代、立派に武士道に殉じたのである。

（附記）

郡長正を小説に書いた人もある。しかし、會津の側から書いた人は一人もなかつた。

話が少年のことだから、武士道とか、あるひは、會津の學問とか、會津魂とか、さうした理論的なものを持つて長正が死んで行つたことよりも、子供の時からの習慣が、自然、長正をさういふふうに育てゝいつたものと考へる方が正しいだらう。

切腹した日も、私は九月二十二日と書いたが、五月一日だといふ人や、五月十八日だといふ人もある。

當時、五月といへば、今の六月である、六月は九州では袷が必要ないから、この切腹の問題が袷から起つたことであるとしたら、或ひは、私の九月二十二日あたりがほんたうではないかと思ふ。

しかし、さうした切腹の日が、いつであつたかは別に問題ではない、十六歳の少年がどうして神色自若として自刄して果てたか、その人となりを解つてもらへれば、作者としてこれにこした喜びはないのである。

私は會津に生れて育つたので、自分達が知らず知らず、父母から強ひられた行儀作法の中には、いま郡長正の傳記を調べつゝ考へて見ると、隨分それと同樣のことがあつたと思ふ。

たしかに會津の子弟教育には嚴しいものがあつたことだけは事實である。

白虎隊

白虎隊讃歌

少年團結す白虎隊　國歩艱難堡塞を成る
大軍突如として風雨來る　殺氣慘澹白日晦し
鼙鼓喧闐百雷震ふ　巨砲連發僵屍堆し
殊死陣を衝いて怒髪豎つ　縱横奮擊一面を開く

時利あらず戰ひ且つ卻く　身は瘡痍を裏んで口藥を銜む
腹背皆敵なり將た安くにか之かんとす　劍を杖ついで間行丘嶽を攀ず
南鶴ヶ城を望めば烟焔颺る　痛哭涕を呑んで且つ彷徨
社稷矣びぬ以て止む可しと　十九勇士腹を劃つて死す
俯仰すれば此の事十七年　之を畫き之を文に世稍傳ふ
忠烈赫々の前日の如く　壓倒す田横麾下の賢

秋風飯盛山

一

——萬事休す——

やうやくの思ひで飯盛山の中腹にたどりついたときは、誰も彼もが一様にさう思つた。

えん〳〵として焔が天にちゆし黒煙は天をおほひ、鶴ヶ城の天守が、その煙の中から、僅かに見えかくれしてゐるではないか、

思へば昨日まで、再三再四嘆願した出陣が、やうやく許され、殿の護衛を仰せつかつて、始めて前線に出たばかりの身ではなかつたか。

相つぐ敗報もものかは秋雨を犯して、勇躍腕を扼し、決死の奮戰をねがふたのに、突然、豫定しない場所で敵の伏兵に遭遇してしまつた。

こゝで白虎隊は、二手に別れた。

一番隊は君公の護衛にあたり、二番隊は隊長日向内記の指揮のもとに、その伏兵に相對した。

糧食を持たない白虎隊は、勇戰それに努めたが、降りしきる雨と空腹のために、無念や一方の血路を開いて隊勢を整ひなければ正面太刀打ちが不可能になつてしまつた。

雨と空腹、舊暦の八月二十二日の夕暮れが迫り、吹く風は、ずぶぬれの體に針

を含んだやうに冷たかつた。

たうとう空腹と疲勞のうちに一夜を野に明し、華々しい戰ひのはずの初陣は白虎二番隊にとつては悲慘な狀態にかはつてしまつた。

だが、誠實無二の少年達は、互ひに助けはげまし、果して城の運命はどうであらうか、一眼、域下の樣子をながめようと、やうやくにして飯盛山へよじ登ることに意見が一致したのであつた。

――その後、雨の降りしきる中を、殿は果して御無事でお歸りになつたであらうか？

誰も彼も、たゞそればかりを案じてゐた。自分達の空腹は、水を飲んでも一時はしのげる。だが氣にかゝるのは城の運命だつた。殿の身の上だつた。

やうやくにして山の中腹までたどりついて見ればもはや、若松市中は一面火の

海とかはつてゐた。

黑煙に閉された鶴ヶ城は、その煙の中にあつた。

「無念だ」

「殘念だ」

「口惜しいな、殘念だな、うぬ、ぞく軍めが」

誰もが、一樣にさう思つたのであつた。

焰の海に包まれた城下を見れば、殿も城も安泰だとはどうして思ふことが出來ようか。

しかも、殿自ら御出馬になるのはいよいよ最後の時が近づいたしるしではなかつたか――

白虎隊の面々は、こゝ二三日來の城下の樣子や殿の思ひつめたお顏色を想ふと

さてこそとうなづくものがあつた。

「飯沼口惜しいぞ」

篠田儀三郎は、さういつて飯沼貞吉の手をしつかりと握つた。

「無念だなあ」

飯沼もたゞ一語、さういつたなり、唇を一文字に結んだ。

小手をかざすまでもない、はるかに見える城下には一ぱいに火の手が上つてゐる。

えん〳〵たる砲聲は天にとゞろく。

「林」

さういつたなり、永瀬雄二は、林八十次の顔を視つめてゐたが、遂に聲を放つて泣き出した。

「長瀬」

林も聲をのんだ。

この二人は平素仲よしで知られた親友同志であつた。

幾度、嘆願しても出陣の許しが出ないのを殘念に思つた永瀬雄二は、

「切腹して嘆願するから、その後で君達が思ふ存分働らいてくれ」

といつて林にとめられたのは、つひ一昨日のことであつた。

「いよ〳〵願ひが叶つたぞ」

出陣の回章が廻された時の林の喜びはどんなであつたらう。

それだのに、僅か一日の戰鬪で、力とたのむ城が落ちてしまつたとは、殿の樣子が知れないとは——聲をあげて泣くのを誰が無理といはれよう。

「いかにも殘念だ、無念だ、しかし、いまとなつては、いたしかたもない潔よく

自刄して、冥途で君公にまみえよう」

誰の考へも一つであつた。

「學問他なし忠と孝」

藩校日新館で受けた教育は、決して生ぬるいものではなかつた。これまで、鍛へ、學び、忠孝一本の道を全うせんとした、紅顔花の如き少年白虎隊であつたのに。いま、會津藩は、悲しや年來の忠誠が、中間にはびこる奸賊共にさまたげられて、天朝に聞える日もなく、無念や、惡名をかうむつたまゝこゝに落城の日にあはうとは。

「我等の忠誠を神よ照覽あれ」

誰も彼も、さう思つた。そして靜かに、氣を落付けた。

「いざ」

一度家を出でては、生きてかへらうと思ふ者は一人もゐなかつた。

一同は山の中腹に整列した。

髪の亂れをなでつけたり。

戎衣の袖を直したり。

傷つける友を肩に、あるひは腕を取つてたすけながら、城に向つて默禱數刻、

今生の暇を告げれば後に思ひ殘すことは更になかつた。

時折、秋風が、昨日の雨にぬれた松ケ枝をさつさつと搖すつていつた。

一

人生古より誰か死なからん

篠田儀三郎が朗々と文天祥の詩を吟じ出した。

「おう」

重傷を負つて歩行も自由でなかつた石田和助がすぐそれに和した。

丹心を留取して汗青を照さん

最後の一句が終ると、石田はむつくりと起き上つた。

「拙者は、手傷が重い、お先きに失禮するぞ泉下でまたお目にかゝらう」

さういつたかと思ふと、する〳〵と双肌をぬいだ。

「ごめん」

古武士の型の如く、作法正しく左の脇腹に、ぐつと刄を突込むと、自若として右へ引きまはしてぱつたりと前へのめつた。

眞紅の血が、さつと枯草を染めた。

「見事だなう」

「これが年少十六歳の少年の最後か」

篠田は、潔よい石田の最後を見ると、感嘆の聲を放つた。

「永瀬、さし違へて死なう」

林八十治が永瀬雄二をうながした。

「よし」

「諸君、おさらば」

向ひ合つた二人は、力をこめて互ひに咽喉を突いた。

永瀬は銃傷を負つて弱つてゐたので全身の力をこめたつもりだつたらしいが力が足らず林は死に切れないで、眞紅に血の吹き出る首をヒタ〳〵と叩いて、

「誰か、誰か、介錯をたのむ」

と、はつきりといつた。

「おゝ」

野村駒四郎が後に廻つた。

「ごめん」

林の首が、ぱつたりと前に落ちると、野村はしばらくじつと屍とかはつた戰友を視つめてゐたが、靜かに坐ると、立派に割腹して果てた。

篠田儀三郎はみなの死をたしかめてから靜かに、自分も腹を切つた。

秋風一陣さつと吹き過ぎれば、そこには、白虎隊十九勇士の屍が鮮血にまみれて横はつてゐた。

主家を想ふ一念、たゞそれだけに生き、それだけに死んでいつた勇士の上に、誰か感激の涙をしぼらないものがあらうか、

會津白虎隊の生きた道は、熱狂的にわつと、氣勢をあげた勇氣ではなかつた。

「沈勇」かうした言葉が、會津全藩の人達の上に、最も適當な言葉として送りたい。

私は、會津に生れ會津に育つた。そして子供の頃からその話を聞かされた。しかし、正直なところ、私達は誰でも、白虎隊や、會津の武士達が特別に偉いとは思つてゐなかつた。

「武士が、主家の大事に際しては、あれくらゐなことは當然だ」と、敎へられ考へてゐたからであつた。

しかし、今となつてはやはり、會津武士道の根本である「沈勇」には、ひとり感激の涙をしぼらざるを得ないものがある。

十九士小傳

安達藤三郎

四面山に圍まれた會津若松の城下も、連山の雪が解けて、四月になると櫻が咲いた。

その頃はまだ、舊暦であつたから、當時の四月はいまの五月にあたるわけである。

四月八日、

その日は、若松から一里ばかり離れた、木流し村の馬頭觀世音の祭禮の日であつた。

幼なくして文武の道を敎へこまれた、藤三郎はことの外、馬が好きであつた。

その日も友人木内明とともに、愛馬をひき出すと、觀世音へ參詣に行くべく、馬にまたがつた。

かすみがたなびく磐梯山を左に見て、駒を並べて走る二人の少年の姿は、まるで繪に書いたやうに美しかつた。

「おい、木内、なか〳〵世の中がやかましくなつたらしいぞ。お殿樣も御心痛なことであらうな」

「いかにも、話に聞けば、京都は百鬼夜行の如しといふではないか、天朝樣のお膝もとだといふのになげかはしいことであるなあ」

二人は馬上でこんな話をしてゐた。

その頃、會津若松二十三萬石の大守、肥後守容保公は、京都守護職の大任を受けて、上洛中であつた。

その頃の京都は、實に百鬼夜行といつても不思議に感じないほど、諸々に浪士が出入し、尊王佐幕の二派が入亂れて暗闘をくりかへしてゐた。かうした混亂狀態を機會に、自分のみの利益をはからうとする人々が出て來るし、中には白晝强盜を働くものさへ出て來た。

京郡守護の大任にある容保公の苦心は、實に察するに餘りがあつた。

ある時、孝明天皇からひそかに、

「奸黨を除き、天下の靜謐を期するもの容保を措いて他に求むべからず」

との御優諚を拜し、感泣したことさへあつた。

かうして孝明天皇の信任日にあつく、會津の藩祖、正之公以來の忠孝一本の教へを、お盡し申すのは、實にこの機會をおいて何時の日めぐりあふことがあるものかと、粉骨碎身の忠誠を誓ふ藩主の上に、藤三郎も明も、どんなにか御苦心のことであらうと、思ひをはせては、熱い血をわきたゝせてゐるのであつた。

「あゝあれを見ろ」

「なんだ」

二人が駒を止めて見れば、はるか觀世音の近くに、祭禮酒を飲んで醉つぱらつたのであらう、一人の農夫ていの男が馬に乘るには乘つたが、馬を乘りこなすことが出來ずに、暖かい春の陽をあびて、すく〳〵と伸びはじめた麥畑の中に馬を乘り入れ散々に荒しまはつてゐるのが、はつきりと見えた。

他に馬をひいてゐる人は、數へ切れないほどゐるが、何れも百姓町人が多く、

乘りまはしてゐるのはその醉つぱらひ、一人であつた。

「歸らう」

藤三郎は、何を考へたか、急に馬首をめぐらすと、もと來た道へ向つて、ぴしつと一鞭くれて走り出してしまつた。

「どうしたのだ」

木内明は、あつけにとられたが、仕方なしに、これも同じく馬首をめぐらして、藤三郎に追ひついた。

「どうしたのだ」

やうやく城下の入口まで來て、息を切らしながら、明がたづねると、

「李下の冠、瓜田の沓」

と、藤三郎は笑つて答へた。

「なるほど」

うなづいた木内明は、藤三郎のつゝしみ深いのにつくぐと感心した。

その日、自分達が馬に乘つて歩くのは侍だからかまはなかつたけれど、馬に乘つて歩いたのは自分達と、その醉ひどれ農夫だけだつたから、後からどんな嫌疑を農家からかけられるか知れない。武士は萬人の範とこそなれ、不德の疑ひをかうむるなどは、先祖代々、きつく戒められたことであつた。

その頃、藤三郎は、まだ、十五歲であつた。もし、十七八歲になつてゐたら、自ら進んで、その醉どれ農夫の不德を戒しめたかもしれない。

かうした、愼み深い藤三郎も、一度、事志と違ひ、西軍と戰ひを交へなければならないことになると、勇躍出陣、鮮血にまみれて奮戰した。

飯盛山で自刄して果てたのは、彼が十七の年であつた。